
元バカと黒髪美少女と薬師

化科学(かがまなぶ)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元バカと黒髪美少女と薬師

【Nコード】

N5786R

【作者名】

かが まなひ
化学 学

【あらすじ】

明久と翔子は幼なじみでオリキャラ理科とも幼なじみ。

化学者で且つ科学者。薬学の最先端は阿部あへ理科りか！？

Fクラスはさらなる過激さ（過激者？）を加えて、試召戦争に突入する。

第一問（序章） 過去の夢（とおいむかしのやくそく）（前書き）

バカテス新作。

Dr.クロさん、の意見を元に書かせていただきます。

至らぬところもありますでしょうが、よろしく願います。

第一問（序章） 過去の夢（とおいむかしのやくそく）

“ 「……………」 ”

泣いてる？ ……これっていつの……………

『ぼくは、何があっても、理科の味方だから！』

『……………私も。ずっと友達』

…ああ、そうか。

『…うん！』

そっか…。…あの頃の事が……………

“ 「明久、翔子……………約束よ。ずっとずっとずっと、友達だって」 ”

『もちろんだよ！ 約束するっ！！』

『……………約束』

夢を見た。

……………遠い遠い昔の夢を……………変わらずにいるのかしら…？ 守れて
いるかしら……………あの頃の、あの時の約束は 褪せずにいるのか…
…ふふっ。あの頃以上に仲良くなったのは、いい変化ね。互いに反
応しあってお互いを深めあつ。……………まさしく化学反応。

今日は気分がいいわ。もう一眠り……………おやすみ、明久、翔子……………

Z
Z
Z
⋮
⋮

第一問（序章） 過去の夢（とおいむかしのやくそく）（後書き）

はじめましての方、はじめまして。知ってる方は、どう思うんです
ようか…？

おはこんにちばんは。（いつ読んでも大丈夫な挨拶）
おやすみの良かったか！？

こんな作者がお送り致します（笑）

では、また。

第二問 寝顔×登校×爆殺？（前書き）

更新。

とりあえず。どぞ。

第二問 寝顔×登校×爆殺？

ブルツ。寒い……目が覚めちゃうじゃない。全く。ふあ……zz
Z……

「あー遅刻しちゃうつ！ って、立って寝ないで！？ 危ないから
明久に手を引かれる。楽だわ、ホント。」

このお人好しを絵に書いたようなのが、幼なじみの吉井よしい 明久あきひさ。

薬学界の天才で最先端。さらには、god of drugゴッドオブドラッグ（神の薬）と呼ばれ、四大天使に数えられる存在である、archangelアークエンジェル（大天使）Raphaelラファエルの生まれ変わりだとも言われる、この阿部あべ 理科りかと友達どころか、幼なじみ。だからといって、他の友達と変わることなく、接してくれる友達。

「また遅くまで実験してたんでしょ？」

「こくり」

「実験する時は、僕に声かけてって言うてるよね？ 何かあってからじゃ、遅いんだよ？」

そう……。 “明久” に何かあってからじゃ遅過ぎる。

「忘れてたわ」

「また？ 忘れないように、顔に書いた方がいいかもね」

「それじゃあただの嫌がらせじゃない」

「僕が気づけば、付き添えるでしょ？」

そうね。だとすれば、……きつとまた “忘れる” でしょうね。

「聞いている？」

「こくりこくり」

この文月学園に入学してから二度目の春が来た。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っていた。風が吹き、桜の花弁がゆらゆらと舞踊る。

その風景に、一瞬目が奪われ ることなどなく、こくり……。こ

の文月学園へ通学途中、二度目の眠気が来、た…。

「本当に「こくり」「こくり」「こくり」「こくり」…」

る？ って、どれだけ頷くのさ！」

「ごめん、おはよ」

「寝てたの!？」

「吉井、阿 ドガンっ！ ぬおッ!?!?!？」

避けられたか……

第三問 そのもう一人の幼なじみは……（前書き）

今回は、ARIAっぽいタイトル。

因みに前回はHUNTER×HUNTER。

第三問 そのもう一人の幼なじみは……

「何やってるのさ!?!」

「びつくりした。寝起きにあんなもの見せられちゃ抹消もしたくなるわよ」

地球に重力があるのと同じくらい仕方のない事だから。

「さて、問題です」

「理科の行動が一番問題だからね!?!」

「先程使われた爆発物の薬品は何でしょうか？」

(1) エチルエーテル

(2) 1,2 ジクロロエタン」

因みに、どちらも発火、爆発を起こしやすい代物。

「よくそんな物持ち歩いてたね!?! バスとか電車通学ならどうするつもりだったのさ!?!?!」

「護身用に常備」

「車内のアナウンスでも言ってるよね!?! “ 車内への危険物の持

ち込みは”って」

「大丈夫よ。扱い慣れてる」

「そういう問題じゃないよ!?! それに警官に職務質問され」

「学生と答えればOKよ。もしくは、護身用に常備って」

「護身用にじゃ通らないからね!?! かなり物騒だから! あと、職務質問って、そのまま仕事してますか? してませんか? 聞くってことじゃないんだよ!?!」

それに何より、“1,2 ジクロロエタン”なんて皮膚に触れただけで危険な薬品だよ?」

「吉井」

「何でしょうか!?!?!?!」

「落ち着け。それと……霧島がおまえの真後ろで待機してる」

「何イツ!?!?」

明久のホントに真後ろ。数センチしか離れてない。明久の影かと思紛うほどに……いや、むしろアレは守護霊ね……バツと振り返った明久。絶妙な機動で明久との距離を維持する翔子。

「近っ! 翔子ちゃん、近い!」

「……おはよう明久」

翔子は明久をハグする。相変わらず仲いいのね。

「翔子、おはよ」

「……理科、おはよう。…明久は、してくれない……?」

「翔子ちゃんおはよう。って、僕を抱きしめながら挨拶はやめて!」

「仕方ないわね……交ざれっというんでしょう?」

明久ったら、仕様がないわね。

「言ってないよ!」

「吉井。おまえも大変だな」

「見ていないでなんとかしてくださいよ!」

「俺は馬に蹴られたくないからな」

「馬??」

「男なら、甲斐性を見せてみる。吉井」

うん。明久に言っても無駄。翔子だって、坂本雄二のこともあるし。

「複雑ね……」

「結局抱きしめるの!」

あ……教室までの距離が遠い……誰よ、こんな遠くしたの

あ。藤堂カヲルさんだったわ……

第四問 トライアングラー殺人未遂事件（前書き）

コナンイメージ。

きーみは、だーれとキスをする

キスっつーか、アレやけど……

第四問 トライアングラー殺人未遂事件

明久は、Aクラスの前で別れを告げてる。

「じゃ、翔子ちゃんまた」

「…明久、私を置いて行っちゃうの？」

「置いて行くとかじゃなく、仕方ないっていうか……」

「翔子、仕方ないんだってさ」

「…置いて行くのは仕方ない？ 私、いらない子……？」

「違う違う違う！ そうじゃないんだよ。ただ……クラスが違うんだ……」

「……！」

あ。驚いてる。

「……………盲点だった」

「ええっ?!?!?!?!?!」

「さつき、鉄巨人に言われたばかりじゃない。仕様がない子ね」

「…明久が私を誘惑してた」

「してないよ!? それに僕なんかの誘惑に負ける人間は存在しない」と

スツと翔子と共に拳手。じいーっと明久を見つめる。

「落ち着いて!? とりあえずとつても腕のいい脳外科医を紹介するから、メモの準備して」

「…解った(わ)」「」

「代表もそつちの子も、解っちゃダメなんじゃないかなあ」

「…なんで? 明久が必要だって言ってるのに」「」

「あはは……あー…そっちの……明久くんだけ？ キミも自分をそんなに卑下しなくてもいいと思うんだけどね」

「僕がカッコよくないのは、ホントのことなんだけどね」

「「そんなことない！」」

「…明久はカッコいいし」

うん、うん。

「ホントに？」

「…可愛いし」

うん、うん。

「え？ え？」

「…襲いたくなる」

うん、うん。

「最後のは明らかにおかしいよね!？」

「あはは 二人共面白いね」

「? 見かけない顔ね。初めまして。かしら?」

翡翠の様な綺麗な色合いの短い髪と元気な印象を受ける笑顔と相まって、ボーイッシュという言葉がしっくりくる様なそんな子。

「うん、そうだね。初めましてだね。」

去年の終わり頃に転校してきた、工藤^{くどう} 愛子^{あいこ}って言います。スリ

ーサイズは…上から78・56・79だよ」

「僕は、そんなっ全然！」

「興味…ない？」

明久がぐくりって唾を飲み込んだ。津々ね。どう見ても。

「育て甲斐あると思うんだけどなあ」

「育てるとか喜んで、じゃない、解らないな、僕は」

嘘。目がきよどつてる。

「ホントにい〜？」

「も、ももちろんだよ。工藤さんが「愛子」へ？」

「愛子でいいよ　ボクも明久くんって呼んでるしね？」

「えっと……………あ　」

「そうそう。愛子って呼んでくれたら、胸触らせてあげるからね」

「　（葛藤中……………）」

悩む時点で、触りたいって言ってる様なものなのに。

「あ、愛子……………あ、でも、僕は別に」

「どうぞ？」

ゆっくりと手を伸ばし始めた明久に、翔子が宣告。

「……………私は悲しい」

「翔子ちゃん、これはあの……………」

「…私が明久の未来を奪う事になるなんて……………」

「ちよっ！　やめて、翔子ちゃん！　まだ未遂だし、その場の雰囲気と言いかノリと言いか……………」

「明久は変わってしまったわ……………翔子、手を貸すわ。これ使って？　大したものじゃないけど」

「……………何？」

「1、2　ジクロロエタン」

「コイツ、本気で僕を殺す気だッ！！！」

「あ、あはは……………」

ちよっとからかうつもりが、既に殺人未遂事件に発展しつつあるし、むしろ発展途上の事件。この状況に工藤愛子の乾いた笑い声だけが常識を残した。

第五問 真面目生真面目糞真面目に不真面目（前書き）

Dr. クロさん、ヒョウガさんありがとうございます。

因みにタイトルは、怪傑ゾロリって感じですよ。小学生ん時読んだなって思い出しました。

第五問 真面目生真面目糞真面目に不真面目

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの2年A組の担任、高橋洋子です。よろしくお願いします」

大きめの窓から中を覗いて見ると、髪を後ろでお団子状にまとめ、眼鏡をかけてスーツをきっちり着こなした知的女性の代表のような教師がいた。

彼女がそう告げると、黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイに担任教師の名前が表示された。

贅沢：っていうか、壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイなんている？ デカければいいってもものでも無いでしょう。黒板サイズで充分事足りるのが理解できないのかしら？

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他の設備に不備、不満のある人はいますか？」

Aクラスの教室は50人の生徒が普通に授業を受けるには過剰なほどの広さと設備があつて、冷蔵庫には当然のように各種飲料やお菓子を含めた様々な食料がエアコンは教室どころか客人に一台で、それぞれが好みの温度に調整できるようになっているみたいだった。更に見渡してみると天井は総ガラス製でありながらスイッチ一つで開閉可能となっていて、壁には格調高い絵画や観葉植物がさりげなく置かれてて 何処かのリゾート施設を意識したわけ？ 全くもって理解に苦しむわ……

「参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給致します。他にも何か必要なものがあれば遠慮などすることなくなんでも申し出てください。

では、はじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください」

どっかから紅茶の香りがした。大和撫子って感じの翔子だけど、洋物も結構似合うのよね。

「……はい」

名前を呼ばれて前に出てきた翔子。黒髪を肩まで伸ばしてまるで日本人形のような綺麗な少女。女性から見ても魅力的に映る。

物静かな雰囲気彼女はそんな整った容姿と相まって、穢れを近づけない神々しさを放ってる。

クラス代表　つまり2年生のクラスを編成する振り分け試験において、この教室内で誰よりも優秀な生徒。

さらに言うなれば、学年で最高成績を誇るAクラスでのトップはそのまま2年生のトップということになる。同じクラスに入れたはずなんだけど、仕方ない。

「……霧島翔子です。よろしく願います」

クラスみんなの視線の中心にありながら顔色一つ変えずに淡々と名前を告げる。

その目はクラスメイトではなく、此方へと向けられている。

霧島は1年の時から有名で、その綺麗な容姿は学年を問わず知れ渡り、男子生徒からの告白が絶えなかった。だが、誰一人として彼女の心を動かした生徒はいない。だからって同性愛者だって噂が立つのはどうだろ。既に決まった相手がいるって考えに至れ無いほどバカなの？

「明久、手くらい振ってあげなさい」

「そだね」

明久が手を振ると翔子も手を振って返してきた。

「Aクラスの皆さん。これから1年間、霧島さんを代表にして協力し合い、研鑽を重ねてください。これから始まる『戦争』で、どこにも負けないように」

戦争ね……カヲルさんに交渉権をつけられるか……やってみましょうか。翔子もその事、考えてそうだし。明久はどうかしらね？

「明久、行くわよ」

「あ、うん」

「そうそう。“力”は隠しておきなさいね」

「理科はどうするの？」

「“力”って？」とは聞かないのね。つまりは、同じ考えを持っている。その上、方針とかもあるのでしょうね……

「姫路より抑えようかな」

「Aクラス戦までは？」

ほら、ね？

「そうね。取り敢えずは、試召戦争を始めないと」

「できるだけ早く、だね」

「ええ。そうなれば、今日明日には仕掛けたいわね」

「そうだね。そうなれば、まずはDクラス。Eクラスは気にしないで平気だしね。姫路さんがいるのは勿論、僕達の操作技術って学園一だしね」

だから、まずはDクラス打倒。

「それにFクラス代表は、恐らく……」

「雄二。だろっね」

だとすれば、話は通しやすい。どう持っていくかにもよるでしょうけど。

「たぶん、ね。ま、とにかく、振り返きましょうか？」

「だね」

「「打倒Aクラス！」」

第六問 コリオ「獄寺」フレイヴェルン。あだ名はデイダラ。「芸術は爆発だ」

ヒヨウガさん、Dr・クロさん感想ありがとうございます。

タイトルに意味合いはありませんw 爆弾関係って感じですよ。

恋する司書、リボン、とある、ナルト。のキャラ達。

コリオの肉で、肉：柏崎星奈を思い出したのはオレだけじゃない！

別にオレは友達が少くない。

はがないの、小鳩は可愛いよね？

第六問 コリオ「獄寺」フレイヴェルン。あだ名はデイダラ。「芸術は爆発だ」

2年F組と書かれた外れかけたプレートのある教室についた。廊下側の窓も割れ、這えば潜り抜けられるほどの穴も開いてる。……カヲルさんは、喧嘩を吹っ掛けているのだろうか……？

慌てている明久は無視して、教室へと入った。

「悪かったわね。遅れたわ」

「すいません、ちよつと遅れちゃいましたっ」

明久は、何処かで頭を強く打ったのね……

「可哀想に……」

「ちよつと待つて理科！ どういう事!？」

「あ、気にしなくていいわ。腕のいい医者紹介してあげるから。…

…めげるんじゃないわよ？」

「何それ!？ どういう事!？」

「傍についていながら、何もできなかったただなんて翔子や玲さん、親御さんに顔向けできない……ううっ……」

「僕のが泣きたいよ!!!」

「黙って早く座れ、このウジ虫野郎共」

暴言を吐きつけてきた実験体は、マウス ああ。翔子の。……アレ

がね……。あんな猿推奨できない。…明久、がんばるのよ？

ゴリラこと坂本さかもと 雄二ゆうじ。あら？ 猿本だったかしら？ 180強の身長があり、程よく筋肉がついていてターザンだ。うん、解ったわ。ターザンと呼びましょ。

「酷いよ！ 先生っ!……って、…雄二?……何やってんの?」

「先生が遅れるらしいから、代わりに教壇に上がった」

「先生の代わりって…雄二が? 何で?」

「ターザンがゲイを見せてくれるのよ? 明久、席に着いて見物よ」

「ゲイ、ガチで頑張ってるね」

「お前らの言い方には悪意しか感じられんぞ？ 俺は、このクラスの最高責任者だからだ」

「……へえー……」

「なんかムカつくな、お前ら」

「ちょっと通して下さいね」

後ろから覇気の無い声があったので振り返ると、そこには寝癖の付いた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにもさえない風体の男がいた。……the Fクラスって感じね。

「それと席についてもらえますか？ HRを始めますから」

恐らくこの人が、このクラスの担任。

「はい、わかりました」

「うーっす」

「ええ」

「えー、おはようございます。2年F組担任の」

福原先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとして、やめた。

……チヨークすら碌に用意されてないのね。ん……勉強させる気無し。と。

「福原 慎です。よろしく願います。」

皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？ 不備があれば申し出てください」

この教師に言うより、カヲルさんに直談判の方がより効率的で確実よね。

早速手が拳がった。まあ、訴えたい気持ちは解らなくもないけど。『せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー。それと彼女がいませんん』

「あー、はい。我慢してください」

……。
『先生、俺の卓袱台の脚が折れています。女友達さえいない現実に心が折れています』

「木工ボンドが支給されています。…自分で直してください」
酷いわね。色々……

『センス、窓が割れてていて風が寒いんです。それと、幼稚園や小学校ですら女の子と仲良くなったことない事実^{じじつ}に人生が寒いんですけど』

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう。頑張^{がんば}って補強^{ほきやう}してください」

この教室^{けうしつ}ら……燃^もそうかしら？

「……焼夷弾^{せういだん}」

「何それ怖いっ！ どうしたのさ、いきなり」

それにしても、カビ臭い。たぶん床に敷き詰められている古い畳のせい。

「やはり、撃ち込むしか無いって言うの……？」

「何を？ ねえ、何を？」

「はい。では、自己紹介でも始めましょうか。

そうですね。廊下側の人からお願^{ねが}いします」

福原先生の指名を受けて、廊下側の生徒の一人が立ち上がり、名前を告げた。

「木下^{きのした} 秀吉^{ひでよし}じゃ。演劇部に所属^{しゆく}しておる」

相変わらずね木下は。…木下姉弟は、性別を間違えたのよ。木下

“姉弟”じゃなく、“兄妹”ね。

「と、言うわけじゃ。今年1年よろしく頼むぞい」

次は……

「……土屋^{つちや} 康太^{こうた}」

限らない変態。相変わらず口数が少ないわね。何を考えているのか、解ったものじゃ……いえ、解り過ぎるくらいに思春期の中学生^{せい}っていう感じかしら？

ん？ 女子の声？

「島田^{しまだ} 美波^{みなみ}です。海外育ちで、日本語は会話ができるけど読み書きが苦手です」

島田美波……

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツでしたので。趣味は」
島田は、どう処理すべきかしら？

「趣味は吉井明久を殴ることです」

「ちよっ!?!? 島田さん!?!?!?」

ちよっどタイミングがいいし、ちゃんと警告しておかなきゃね。

「阿部理科よ。幼なじみを傷つける存在には、お薬を処方してあげるから」

『幼なじみって誰ですか?』

「明久よ」

『『『何いつ!?!?』』』』

五月蠅いわね……。

『吉井明久に死さえ生温い制さ』

ひよいつ

一口サイズの物体を投げ入れる。

パクッ カリッ

口の中の水分とナトリウムボロハイドライド + 酸化剤、アル
コール、酸 e t c …… 噛んだ時漏れた薬品の化学反応。つまり
は………

『ズガン！ バアッ！?!?!?』
『近藤！』

爆発。

「ふつ…汚い花火ね。 あと、誰だったかしら？ 処方箋が欲しいのは」

一人一人、目を覗き込む。

『『『 ブンブンブンブン！ 』』』

素直でよろしい。じゃ、あとは……

「はい。あ〜ん」

「嫌よ!?! あんなの見せられて口開けるワケ無いじゃない!」

「アレは、序ノ口よ?」

「序ノ口!?!」

「Sodium tetrahydroborate (テトラヒドロホウサン ナトリウム)」

「え?」

「化学名又は一般名で言う『水素化ホウ素ナトリウム』のことよ。

『水素化ホウ素ナトリウム』っていうのはね、水に触れると自然発火するおそれのある可燃性・引火性ガスを発生させるだけでなく、飲み込むと有毒で皮膚に接触すると有毒。発生させるガスによっても、重篤な皮膚の薬傷や重篤な眼の損傷、呼吸器への刺激のおそれのある危険物なの」

「何て物持つて来てるのよ!?!」

「だから、『水素化ホウ素ナトリウム』」

『『『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』

ん? まあいいわ。

あ、次は明久の番ね。

「あ、明久、貴様の番だ」

「ねえ。これって、ある種曝し首だよ……」

「明久、余計なことは言わずにさっさと終わらせてくれ。生きた心地がしねえ」

「解ったよ。仕方がない……」
「ホン。えーっと、吉井明久です。」

気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

「明久がそう望むのなら……ダーリン」

『『『『ぐはっ！』』』』

「……こんなつもりじゃなかったんだけど、……幸せをありがとう」

明久、意外と喜んでいいるわね……。翔子に報告かしら？

第七問 理科のみが知るセカイ（前書き）

「理科ねえさまあつ」。えるとりゆうで？…るうと…まあし。明久とつるんだら、きつとマジカオス。

神のみ。も書きたいかな。

坂井千草さんのお話とか、ギャグまみれの恋姫とか、、なのはも何種類も考えちゃってるww

書けないなあ。亀更新な自分じゃあな。。。

ま、そのうち書きますw^{むほー}

ヒヨウガさん、Dr・クロさん、断空我さん。感想有難うござい
ます。

さつきこつちかきました。

では、どござ。

第七問 理科のみが知るセカイ

不意にガラリと教室のドアが開き、息を切らせて大きい胸を上下させて、そこに手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ？』

誰かが。って言うよりは、むしろ“誰もが”、というべきか。教室全体から驚いたような声が上がった。姫路だって人類よ？ びっくりする事無いんじゃない？

クラスがにわか騒がしくなる中、平然としている福原先生が話しかけた。……初めて先生らしいと思っただわ。確定できないところが、この先生って気もしてきたわ。。。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願ひします」

「は、はい！ あの、姫路こめろ 瑞希みずきといます。よろしくお願ひします……」

小柄な身体をさら縮こまらせて声を上げる。

白く透き通るような肌に、綺麗にキューティクルを光らせているふわっとした柔らかそうな髪。誰にでも同じように気の使える優しさで愛しさと切なさ？……明久のバカが感染うつったかしら？ まあ、それに加えて保護欲を掻き立てられるような可憐な容姿。と、同性から見ても魅力的に映るし、嫌味ったらしくない。人として出来すぎ……

「出来杉ちゃんね」

「理科は何を言ってるの？」

「どつちかと言うと、僕の方が置いていかれてるんですが……」
姫路がさつきからちらちらこつちを見てくる……ガン飛ばそうっ
て？

「大人しい顔して…侮れないわね」

「理科。もう黙ってようか」

酷いわ。非道で外道で邪道で極道よ。

「あ、えっと…振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました…
…」

その言葉を聴いてクラスのみんなは『ああ、成る程』と頷いた。

試験途中の退席は0点扱い。

姫路は振り分け試験を最後まで受けられずに、結果としてFクラスに振り分けられたってワケ。

そんな姫路の言い分を聞いて、クラスの中から、ちらほらと言いつつ
訳の聲が上がってくる。

『そう言えば、俺も熱（ ）の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？ アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力が出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『はい、今年一番の大嘘ありがとう』

……何なのか……理解できないの。…枯れ葉剤を撒けば、大人しくなるだろうし……。けど、撒くところちにも被害が出るし。無難に
王水かしら？

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

そんな中、逃げるように雄二と明久の間の卓袱台に着こうとする
姫路。

「き、緊張しましたあ〜……」

席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏した。何気に

行動力あるわね。

「あのさ、姫」

「姫路」

「は、はいっ。何ですか？ えーっと……」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「え、あ、姫路瑞希です。よろしくお願いします」

姫路が深々と頭を下げた。丁寧。姫路、さすが。と言ったところかな。

「ところで、姫路さん体調は大丈夫なの？」

「よ、吉井君。お陰様で今日来る事ができました」

「んーん。気にしないで。姫路さんが元気なら、それでいいんだ」

「は、はい！」

ターザンさんが何かを始めるようです。

「わらw」

「ところで姫路。明久がブサイクですまん」

「まだ続いてたのかっ！！」

明久の顔を見て驚いた姫路へ、ここぞとばかりに雄二が明久を弄る。

「そ、そんなこと無いです！ 目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！ その、むしろ……」

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

「え？ それは誰」

「誰よそれっ！？」「そ、それって誰ですかっ！？」

島田と姫路が同時に、明久の台詞を遮って聞いてきた。

「たしか、久保」

「久保さん？ どの久保さん？」

「利光としみつだったかな」

久保 利光

(性別/男)

「……………」

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」

「もう僕、お婿にいけない…」

「もらつてあげようか？ お嫁さんに」

「なあっ!？」

明久が耳元に唇を寄せて囁く。「言わないでよ？ 翔子ちゃんに」
つて。んっ…、くすぐりたい。

「明久、半分冗談で言ったんだ。安心しろ」

「え？ 残りの半分は？」

「姫路、本当に大丈夫なんだな？」

「あ、はい。もうすっかり平気です」

「ねえ雄二！ 残りの半分は!？」

明久の話を流し、とりあわない雄二に対して、明久は大きな声を
出した。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

そのせいで、パンパン、と教卓を叩いて福原先生が警告を発して
きた。

「あ、すいませ」

バキィツ、バラバラバラ……………」

突如、先生の叩いた教卓がゴミ屑と化す。

軽く叩いただけで崩れ落ちた。ほんと、ゴミ屋敷ね。……………んゝ力
ヲルさん、ここまでするかな？ これじゃあ、余計に勉強しなくな
る人間が増えるだけでしょうに…」

「えゝ……………替えを用意してきます。少し待っていてください」
「あ、あはは……………」

明久の隣で、姫路が苦笑いをしていた。

ん？ 明久が、真剣に考え込んでる……。翔子との約束もあるしね。

さあて、どうしよつか？ 明久？

お互いに目を見て頷きあった。

第八問 え！？ 雄二と契約っ（パクティオー）！？（前書き）

暮灘雪夜さん、雪門さん、ヒョウガさん、断空我さん、感染…感想ありがとうございます。

断空我さん、今回も短いです…すみません。

こちらはちょこちょこって書いて行きます。メインで書いているのが疎かになるのは嫌なので、悪しからずご了承ください。申し訳ありません。

今回のタイトルは

『ネギま！』

契約…約束事に近いでしょうかね。

それではどうぞ。

第八問 え！？ 雄二と契約つ（パクティオー）！？

明久が坂本に声をかける。

「……雄二、ちょっといい？」

「ん？ なんだ？」

「ここじゃ話しにくいから、廊下で」

「別に構わんが」

明久と坂本を追って廊下へと出る。

「んで、話つて？」

「この教室についてなんだけど……」

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

「雄二もそう思うよね？」

「もちろんだ」

「雄二、Aクラスの設備は見た？」

「ああ、すごかったな。あんな教室は他に見たことがない」

一方はチヨークすらないひび割れた黒板。

もう一方は値段も分からないほど立派なプラズマディスプレイ……

………確かにね。常軌を逸脱してるわ。

「そこで僕からの提案。折角2年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」

「戦争、だと？」

「うん。しかもAクラス相手に」

「…何が目的だ」

急に坂本の目が細くなった。まあ、明久は『観察処分者』のバカだと思われているでしょうしね。

「いや、だってあまりに酷い設備だから」

「嘘をつくな。全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、ありえないだろうが」

「そんなことないわよ？　ねえ？　明久」

此処が異質な空間に感じるかもしれない。

坂本雄二という存在が、吉井明久と阿部理科の言葉ことばの糸に絡め獲られる人形のようなのだ。

「もちろんだよ。個人的な理由はあるけれど、姫路さんのような体の弱い人に使い続けて大丈夫だと言える環境じゃないし、既に咳き込んで辛そうだったからね」

「藤堂カヲル学園長に直訴も考慮しているわ」

坂本、冷や汗？　気をつけて、風邪引くから。ふふっ。

「カビを吸い込めば体内で繁殖するからね……度々出して申し訳ないんだけど、姫路さんのような人だと日和見感染して皮膚にも症状が現れる可能性もあるし」

「ま、そうなればこの学園は終わりでしょうけどね。個人的に潰れてもらっては困る理由もあるの」

けれど……ま、貸しにしましょうか、カヲルさん。

「おまえらそれぞれに理由があるってか」

顎に手を当てて思考している。

「そうなるね」

thinking timeはお終いよ。

「それで？ 坂本雄二代表。結論は出たのかしら？」

「……興が乗らねえな」

よく言うわ。態々Fクラスの代表になるよう調整した男が。

明久に視線を送ると、少し笑みを深めた。ちよつとぞくつてした。

「まあ、僕は別にいいんだけどね」

「は？ 明久、何言ってやがる、おまえは」

明久の発言が理解できず、坂本が問い返してた。

「確かにね。理由があるって言ったけど、日にちをおいても“僕は構わないよ”

「っ！……」

既に詰んだかしらね？

「雄二はどうか知らないけど？ それにいざとなったら、向こうから仕向けるようにすればいいだけだし？」

「はあ……明久に追い詰められるとはな……。おまえの入れ知恵か？」

「ふふっ……。さて、どうかしらね？」

坂本が諸手を上げた。

「完敗だ。どのみち言われるまでもなく、俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思っていたところだ」

やっぱりね。謀ろうなんて数年早いんじゃない？

「で、雄二は何がしたいの？」

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明を試してみたくてな」

「それが全てかしら？ 坂本」

「さあてな」

自信に満ち溢れた意地の悪い笑みを浮かべていた。

「それにおまえらのお陰で、俺はAクラスに勝つ作戦も思いついた

し おっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

「あ、うん」

ふーん…… Aクラスに勝つ……ね。

神の薬が見ててあげる。…元神童、失望させないで頂戴よ？

さ、見せてもらおうかしらね……神童と呼ばれた男の力を。

第九問 秋葉（あきば）くんバリに言ってみた。秋葉（あきは）じゃないよ？

秋葉くんは、かななぞ。

秋葉は結構いるか……宇宙をかける少女（獅子堂秋葉）とか、月姫（遠野秋葉）、後は……なんかいたかな？

今回さらに短い。

でもどーぞ。

第九問 秋葉（あきは）くんバりに言ってみた。秋葉（あきは）じゃないよ？

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

「壊れた教卓を先生が持ってきたボロの教卓と替えて、気を取り直してHRが再開される。」

「えー、須川^{すがわ} 亮^{りょう}です。趣味は」

特に何もなく、淡々とした自己紹介の時間が続いた。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」
「了解」

坂本で最後のようだ。

先生に呼ばれて坂本が席を立て、ゆっくりと教壇に歩み寄る。その姿にはいつもの巫山戯た雰囲気は見られず、クラスの代表として相応しい貫禄を身に纏っているように思えた。一瞬だけどね。

「坂本君は、Fクラスの代表でしたよね？」

先生が坂本に尋ねると、鷹揚に頷いていた。……………Fクラスの代表なんて自慢にもならないわ。それにも関わらず、坂本は自信に満ちた顔で教壇に上がり、こちらの方に向き直った。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

「ゴリラ」

「明久、絶滅危惧種なんだからあまり虐めちゃダメよ。ストレスで死んじゃうかもしれないから」

「おい！」

「そうだね」

「そうじゃねえ！」

何を騒いでいるのかしら……檻に入れるべきよ。麻酔薬あったはずよね……大人の象が1〜2秒で昏睡するのが。

「しかも、世にも珍しいゲイゴリラだからね」

「どなんだ!？」

「略してゲリラね」

「おかしいだろっ?!！」

「「そう?」「」

「つく……。…話が逸れたな……さて、皆に一つ聞きたい」

坂本持ち直したわ。つまんない。

坂本はゆつくりと、全員の目を見るように告げる。間の取り方が上手い。いつの間にかみんなの視線は、坂本に向けられていた。

クラスの様子を確認した後、坂本の視線は、教室の各所に移りだす。

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

クラス全員が、坂本の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていった。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

雄二は一呼吸おいて、静かに告げる。

「不満はないか？」

「大ありじゃあつ!!」

2年F組生徒の魂の雄叫び。バカ雑兵共は乗せやすいみたい。モルモット

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ!!』

『理科たん、虐めて！ ハアハア…』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する!!』

「!!」

……何、今の。

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？　あまりに差が大きすぎる！』

堰を切ったかのように次々とあがった不満と屑の声。

「みんなの意見はもつともだ」

Fクラスの反応に満足したのか、自信に溢れた顔に不気味な笑みを浮かべてさっきのセリフを無視した。……罰が必要ね。木下に快く同意をもらって、言ってもらおう。

「雄たん萌へ（え）っ」

「誰だっ！？　殺すぞ！！！」

ねちっこい声を出してもらったのが良かったのかしら？　過剰なくらい反応を示したわね。

「雄二、どうでもいいから続けて」

「いや！……まあいい。とにかく、これは代表としての提案だが」

野性味満点の八重歯を見せ、

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

第十問 恩を仇で返すなんて不義理は有り得ん。義理と任侠の狭路（おとこみち

女でも言っんよ？ 同じ事。

b y・瀬戸 燦

暮灘雪夜さん、D r・クロさん、龍夜M k 2さん感想ありがとう
ございます。

さて、今回のタイトルは

『瀬戸の花嫁』知ってるかな？

モモーイが歌うやつ。

ほとんど進んでないけれども、よかったらどうぞ。

第十問 恩を仇で返すなんて不義理は有り得ん。義理と任侠の狭路（おとこみち

Aクラスへの宣戦布告。それは、このFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思わないだろう。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

『阿部さん、いや、阿部様がいれば安泰』

『雄たん、ハアハア…』

「誰だ（誰よ）！」「」

「俺はこの拳に全てをかける！」

「Hg₂(NO₃)₂。今手元にあるのは硝酸水銀（I）だけね…

…目も皮膚も腐食させてあげるわ」

硝酸水銀（I）。別名、硝酸第一水銀。化学式：Hg₂(NO₃)₂。

ラットに経口投与した場合の半数致死量（LD₅₀）は170 mg/kg、経皮投与した場合の（LD₅₀）は2330 mg/kg。眼や皮膚への腐食性がある。摂取した場合は主に腎臓や神経系に影響が及ぶ。これ自体は不燃性であるが、酸化剤であり周囲での燃焼を助長する。加熱による分解で腐食性・毒性のある煙霧を生じることがある。

「理科、落ち着いて。僕や理科にまで被害が及ぶよ？」

「ガス室を作り上げる方が確実ね」

「怖ええよ!」

坂本。次の獲物は…あなたかもしれない……

「とにかく、必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

そんな圧倒的な戦力差を知りながらも、坂本はそう宣言した。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な意見が教室中に響き渡っていく。

個人戦なら、勝ち目はあるんだけどね。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

ゲリラの言葉を受けてクラスの皆が更に騒めく。

「それを今から説明してやる」

不敵な笑みを浮かべて、壇上からみんなを見下ろす。

「聞いてあげる。説明なさい」

「はあ…、つたく。おい、康太。畳に顔つけて姫路と阿部のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………!? ブンブン」

「は、はわっ」

「ねえ、見る?」

スカートと裾を持って、下着の見えるか見えないかのラインまで
ずり上げる。

「……おおーっ……」

クラスが揺れた。……何？ 物好きが多くない？

「お代はあなた方の命で」

「……おいつ！？」

「冗談よ。ぼそっ 半分は」

「で、だ。姫路と阿部のスカートを覗き込んでいたのが、土屋康太。
こいつがあ有名な、寡黙なる性識者だ」
ムッツリーニ

「……………！！ ブンブン」

土屋康太という名前はそこまで有名じゃない。…けれど、ムッツ
リーニという名前は別。知る人ぞ知るその名は、男子生徒には畏怖
と畏敬を。女子生徒には軽蔑を以て挙げられる。らしい。ホントに
……Fクラス以外も駄目なんじゃないかしら。

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る土屋。

姫路がスカートの裾を押さえて遠ざかると、土屋は顔についた畳
の跡を隠しながら壇上へと歩きだした。

「ムッツリーニだと……？」

「馬鹿な、ヤツがそうだというのか……？」

「だが見る。あそこまで明らかかな覗きの証拠を未だに隠そうとして

いるぞ……」

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』
『実は俺もムツツリだ』

今のカミングアウトは必要だった？

「ムツツリーニ、仲間がいたみたいだよ？」

「……………！！！！ ブンブンブンブン」

「????？」

姫路は頭に多数の疑問詞を浮かべてる。あだ名の由来は、『ムツツリスケベ』。姫路に教えてあげよ。

「姫」

「おおーっと！ 雄二、続けて」

明久、人前で羽交い締めだなんて、…大胆になったわね。翔子に

……

「ぼそっ 余計なことは言わなくてもいいからね？」

何で解ったのかしら？

「おう。…姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だってその
実力はよく知っているはずだ」

今、凄い眼差しを受けた気がするわ。

「えっ？ わ、私ですかっ？」

「ああ。主戦力だ。期待している」

1年の時学年4位だった実力者。期待するのも仕方ないことかもしれない。

因みに、2位と3位は存在せず、同立1位が二人いる。名前は公開されてはいないけどね。

『そつだ。俺たちには姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

『阿部様がいれば勝つる』

『霧島さんは俺の嫁』

瞬間。とある3人から攻撃されて公言者を撃沈。

「木下秀吉だつている」

何事も無かつたかのように再開……間違えた。何事も無かつたわ。秀吉は美人な男の娘として有名。演劇部のホープのこととか、Aクラスにいる双子のお姉のこととかでも有名だったりする。

『おお……！』

『ああ。アイツは確か、木下優子の……』

『秀吉、可愛いよ秀吉』

「当然、俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそつな奴だ』

『坂本つて、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『雄たあん』

『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな!』

「誰だあつ!?!」

坂本を呼んでいる声にまた叫ぶ。

でもまあ、クラスの士気は確実に上がっていった。思った通りね。けれど、数学がBクラス並の島田美波を呼ばないって事は知らないって事よね。それならばきつと、他の人の点数についてe t c エトセトラ…知らない事があるのね。

「それに、吉井明久と阿部理科だっている」

……………シン

そして一気に下がる。オチ担当? チラツと明久に目をやる。

「ちよつと雄二! どうしてそこで僕らの名前を呼ぶのさ! 全くそんな必要ないよね!」

ふつ…。よく言うわね。あ、坂本が“いつもの”バカな明久に戻ったって安堵してない? そんな嫌だったの? 明久に言い包められたこと。

『誰だよ吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

『じゃあ、阿部理科ってのは?』

『さあ?』

『おデコちゃんだろ』

バンド使ってオールバックにしてるだけでしょ。坊主だったらどんな反応をしたのかしらね。とりあえず、明久と翔子には怒られるわね。

「って、ホラ！ 折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！

僕は雄二達とは違って普通の人間なんだから普通の扱いを ってなんで僕を睨むの？ 士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

「む…そうか。知らないようなら教えてやる。こいつらの肩書きは

《観察処分者》だ」

「「え？」」

「どういうこと？ むしろ、どういっつもり？」

「理科もだったんだ（知ってたの？）」

明久が話ながら唇の動かし方を変えている。腹話術の要領で話している訳だ。相変わらず無駄にすごい技術ね。勿論、明久には劣るけど、できないこともない。

まあ、新薬開発研究中とかだと何処で誰が見ているか解らないもの。事実、盗聴、盗撮は頻繁にあったし、探偵や隣人に扮した何処ぞのスパイなんてのもいた。リアルでそんなのがいる事にも驚いた。

『なあ、……《観察処分者》って、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違うよっ！ ちょっとお茶目な17歳につけられる愛称で」

その方が都合がいいって事かな？ どう思う、理科)」

「やめなさい、明久。みつともないわ。潔く認めるのよ（同意見よ。焦って綻びでもしたら相手の思うツボだし）」

因みに、永遠の17歳です おいおい （全く、面倒な事になったわ…）」

挙げ足取りなんてやられてしまえば、きっと余計な要求をされる。ホント、意地悪婆さんだわ。

「そうだ。《観察処分者》っていうのは、バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！（この後行く？）」

「言ってるいい事と悪い事があるわ（そうね。これが終わった後でいいでしょ）」

「あの、それってどういうものですか？」

姫路が小首を傾げて聞いてきた。頂点に近い場所にいた姫路に、この単語は馴染みがないだろう。知ってるからってどうってことはないけど。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類いの雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣で熟すといった具合だ」

そう。本来、召喚獣は同じ召喚獣は触れるが、物に触ることができない。召喚フィールドとか、立ったりすることはできるみたい。他はただの霊で、《観察処分者》は実体化させた霊ってところかしら。例えにまでオカルトを含めてしまうのは、アレなだけだ。

「そうなんですか？ それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利

「ですよ」

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ（とりあえず、影ながら頑張りますか）」

「そうね。自慢できる事じゃないもの（そうね。さっさと終わらせてしまいましょ。話さないと）」

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。おいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな』

あら?

「理科は!?!」

『阿部さんは俺が守る!』

『いや、おれが!』

『俺も!』

カミカゼ部隊でも作ろうかしら?

「ああ、そうなる。だが、気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚共だ」

「雄二、そこは僕達をフォローする台詞を言うべきところだよな?」

「カス共に言うべきこぶあつ!?!?!」

カミカゼ隊は、言葉だろうと危害を加える者に容赦は無し、と。
メモメモ……

「と、…とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征

服してみよつと思つ」

「理科」

「ええ」

行きますか。

「皆、この境遇は大いに不満だろう?」

『『『当然だ!』』』』

ノリノリね。

「ならば全員筆^{ペン}を執れ! 出陣の準備だ!」

『『『おおーっ!』』』』

テンションが上がってきたのは解るけれども、簡単に乗っかり過ぎじゃないかしら。…あ、そうだね。

「俺達に必要なのは卓袱台ではない! Aクラスのシステムデスクだ!」

『『『うおおーっ!』』』』

「ニューヨークへ行きたいかあつ!』!」

『『『Yeahhaaーっ!』』』』

「い、いやー……」

クラスの雰囲気には圧されたのか、姫路も小さく拳を作って掲げた。意外とノリがいいのね。

「うん」

「何を言っているのさ！？ 理科は！」

笑みが戻らない。うんうん。と、何度も頷く。

「何で『満足満足！』みたいな顔してるの？！」

「正解よ。何番のパネルをとる？」

「どこの！？ ていうか、何チャンスなの！？」

じゃ、そろそろ行きますか。明久に視線をやる。

「うん」と頷いている明久を横目に、教室を出た。その後ろでは

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を……明久は？ ををいつ！？ いないのか！」

何か言っているのが聞こえてきた気もするが興味無し。

そう、目指すは学園長室。今はそれだけ。

第十一問 「血染めのミズキ」ん？ ユーフェミアと園崎？？（前書き）

タイトルは、知る人ぞ知るコードギアスです。

R2は見えないんやけど、批判的な意見が多い気が。種運命よかマシなのかな。

キラもアスランもホントは劇的に死ぬ予定だったからもって面白い作品になってたはずなのに、無理矢理修正したから俺つえーになったとか。

第十一問 「血染めのミズキ」ん？ ユーフェミアと園崎？？

カヲルさんとの話が終わって教室に戻ってみると、アウストラロピテクスがこつちを見ていた。猿に近いただけあって獲物を狩る時に見せる威嚇の眼差しは、迫力あるわね。

「ケンカ売ってんのか!？」

「あら？」

「理科、声に出てたよ？」

言いたいのはそのいう事ではなくて、痛い目を見たのを覚えていないのかしら？ っていう事だったんだけど…。

ほら、捕獲された。抵抗虚しく、数の暴力に負けてる……。

あ、序でにしたかったのは

「聴力検査よ。囁く程の音量で果たして聞こえるのかどうかっついでっ」

「実験は大成功だね！」

「ウヴオオイッ!? 俺をがふっ!?!?」

殴り飛ばされた。さすが、半端ないわ。カミカゼ部隊は強し。

「やはり坂本は、動物界脊索動物門哺乳綱サル目（霊長目）ヒト上科ヒト科ゴリラ属。」

つまりはGorilla。学名：Gorilla Isidor
e | Geofroy | Saint - Hilaire . と I . G
eoffroy , 1852 . 所謂、ニシゴリラとヒガシゴリラに
別れるんだけど、タイプ種を詳しく言うと、ニシゴリラがGori
lla gorillaで、ヒガシゴリラはGorilla be
ringei。どつちのタイプかっていうのは判別が難しいと思う。
あ、新種なのかも」

「ん？ ゲイ？」

そこ拾うのね。

「違えっ！ 何回ゴリラつつうんだよ！ てめえはばあっ！？」
学習しなさいよ。」

ゲイが何らかの爆発でぶっ飛ばされた。うん……落とした記憶は無いのだけれど。あ、さらに壁で跳ね返ったところに飛び込んで頭を掴み空中殺法から鳩尾に鋭い突きを入れ、透かさず頭を鷲掴み、物凄い勢いで引き摺って壁へと叩きつけること数回、もう坂本は血を滴らせ白目を剥いていた。

「やめて！ 坂本のライフはもうゼロよ！？」

「理科が原因なんだからね？ あ、血は見ない方がいいよ」と言われながら、明久のハンドタオルで目を塞がれる。

「目隠しブレイね？」

「ちよっ！ 変なこと言わないでよ！？」

それを聞きつつ、坂本達と移動した。後で聞いた話、坂本は這って行ったらしいわ。

階段上って扉を開けたっていう事は……屋上ね、おそらく。

「理科は、明久に目隠しされたまま屋上へと連れ込まれたのだった。きやっ！ 何する気？ 明ひ、あんっ」

「どう？ 迫真の鳴き声。」

「よおしいいいい？」

「よーしいーくーん？」

「何もしてないから！ っていうか、二人は何で」

「「あっははははっ！……！」「」

「怖っ！？ 理科っ！ お願いします、やめてくださいっ！！ ほんら、島田さん目が虚ろで焦点合っていないし！ 姫路さんなんか、瞳孔開いちゃってるじゃんかあっ！……！？」

クスッ。面白い。盲目的というのは、彼女達の為の言葉ね。……

寧ろ独裁的？ ジャイアニズムの権化。言い得て妙だわ。

なんて肩を震わせて笑っていたら、

「笑い事じゃあないんだからねっ!？」

もうっ、明久。涙目で肩を掴まないでよ。

「劣情を催すでしょう?」

「なんでさっ!？」

「疑問を挟む余地なんて無いでしょうに。可笑しなこと言うわね」

「おまえがなっ!」

坂本、必死過ぎ。

「ウケるわね」

坂本にはきちんと届いたみたいだ。噛み付いちゃダメよ、もうほぼ思い通りに動いてくれるようだから。

「そんなことよりも! 吉井君は…阿部さんと何処まで行っただんですか? ですか?」

「クスクスツ、どこ行っただのかしらあ?」

「何処までだなんて…: 恥ずかしいっ、ね? 明久」

「ゾクツ 同意求めないで!? ていうか、火炎にガソリン注ぐような真似やめてよ? うげっ! 二人の顔に今度は影が射したし!

! ほら、島田さんなんて、あの眼でケタケタと嗤い続けてんだよ!???!」

あ。ポニーテイルの娘が鉄バットで素振りを始めたわ。あら、グリップの底に何か…悟、ご? あれは名前かしら? さと

「誰のバット奮ってんの!? ひぐらしないちゃうのっ?」

「…: 準備完了致しました」

土屋? 何をやってているのかしら? あれはマイク? 歌うの?

こほん。と可愛いらしく咳払いしてから始まった。

「私の敵（吉井を奪う者）を名乗る皆さん、お願いがあります。死んでいただけないでしょうか?」

この場の人間以外にも放送をしているのね。電波ジャックってやつかしら。

「え、今なんと? 姫路さん?」

とりあえず静ちゃんが道路標識で銃弾を防いでくれて、ダチに手
え出してんじゃねーぞとか言ってくれるの待ってみる。……………

……青だぬきがいればねえ……。

「今日の阿部理科は自由だあ」

「何言ってるんのさっ」

今日も自由でした。

「FFF団の方々、皆殺しにしてください。虐殺です」

「虐殺姫ならぬ虐殺姫路さんがっ!?!?!?!」

「おまいらもち着け。さすがにシュウシュウがつかんでゴザル。う
ほっ、いいゆふい」

「理科あっ!?!」

ちっ……。悪巫山戯も此処までにしましょうか。

「舌打ちしたよねっ?」

「……………(サスサス)」

自分の頬の辺りを擦りながら周りの目を気にする土屋を少し上目
遣い気味に見た。

「……! な、何だ?」

「覗いていた時の畳の後はもう消えてるよ? ていうか、否定しな
いでよ? ムツツリーニがHなのは周知の事実だから」

「……………!!! (ブンブンブンブン)」

ここまでバレているのに明久の言葉を否定し続けるなんて、ある
意味凄いわね。

「土屋」

「……………(ゴクリ)。どうした」

上目遣い+潤んだ瞳。多少は効果の見込みがあったみたい。
裾をゆっくりとずり上げながら聞く。

「何色だった?」

「純白」

「即答か、ムツツリーニ」

「ちなみに姫路はみずいろだ。」

純白ももちろんいいのだが、同年代に比べ、色気のある阿部には黒のレースも非常によく似合うと思う。しかし、いかんせん俺が強要してしまつては些か不満が残つてしまふ」

淀みなく話した土屋に吉報を。

「黒のレースなら持つているわよ？」

「「「「よしっ！」「」「」

男子陣が残らずガッツポーズ。瞬間。場は殺意に充たされた。それでも言葉を紡ぎ続けるのをやめない。

「ちなみに、今日の下着はシルクだから肌触りがスゴくいんだけど 触つてみる？」

ガタツ、と例外なく反応したバカ達。殺意よりも目先の欲望が勝つたのね。ブシャアアアアツつて音も聞こえるけど気にしたら負けよ。

P r r r r r ……。電話？

「なっ！？」

着信画面を見て絶句している猿に変わって出てあげましょう。はいっ。

『もしもし、雄…』

「はい、もしもし」

「ッ…！…」@

地球の言語で話なさいな。

『…っ！ 誰』

「シルクの下着のクラスメイト」

ここで電話を返す。

それにしても翔子、頭に血が昇って誰と話したかわかってないみたい。

「し、翔子、あのだな」

『雄二、』

ちよっと甘い感じの声を出してみる。

「んっ。電話中なんでしょ？ 今触っちゃダメよ？ 明久も？」

『話がある！！！！！』

「触つてねえよ！」という声を掻き消して、向こうの殺意が伝わる。ここは武芸者達が集う何かがあるのかしら？

「頼む！ 待ってくれ翔子！」

『雄二大丈夫。一瞬で終わるから』

「おかしいだろっ！？ 話は一瞬じゃ終わらねえよ！ ……？ 翔子

…？」

「切れてやがる！！」とキレる若者。 ……ぷっ。

「愉快ね」

「うおっふおおいつ！？?!」

キレ過ぎてテンションおかしいわよ？

あ、明久助けないと。

「ていつ「ちよっと待ったああっ！！」 何？」

「なにで殴ろうとしてるわけ！？」

「鉄パイプ」

「そう！ それっ！ “ていつ”ていう可愛い言い方が吹き飛ばよね！？」

そうかしら？ 顎に人差し指を当てて首を傾げる。

「“そうかしら？”とか思わないでよ！？ 腕がブレて見える程の速さで奮われてたんだから！」

「正解」

よく解ったわね。なら

「アタックちゃくんすっ。どの子を殴る？」

「本当にアタックする気なの！？ ていつか、殴らないから！」

「はいっ」

どっぞ。

「はいっ」じゃないよ！ 鉄パイプいらなからっ」

我が儘ねえ。なんて思っていると島田が目を潤ませて何か言おうとしたところで……

P r r r r ……

明久にも電話。

「あ、もしもし？ どうしたの？ え、っ！？」

明久は携帯に手を当て、口元を隠す。だが、「ちゃん」と聞こえる為、女の子と話しているのは理解できる。

收拾がつかなくなる前に終わらせますか。ホント、仕方ないわね。

とりあえず収めた後でお弁当を食べて、Dクラス戦の話。午後に開戦だから思考をまとめておくべきね。余計に力は曝さず、効率よく勝利を手に入れる。

明久を見やると苦笑いに混じって思考しているのだと思わせる目が時折伺えた。

坂　ゴリの話の話を聞いていると、ここぞというところで姫路を使うのだと解った。Dクラス代表まではほぼ力押しでしょうけどね。

影でこっそり動こうにも土屋がいるからねえ……味方とはいえ情報漏らしたくない。土屋の情報収集能力と隠密行動は現代の忍びと言って差し支えないだろう。カヲルさん以上に油断ならないかね。

いつそのこと引き込む？　ファインダー越しに覗かせてやると言えは二つ返事で答えるわね。

………………。けど今のところは保留かしら。現行のまま、でも単独行動はできるようにしておこうかしらね。遊撃として動くのはアリ…？　カミカゼ部隊を使って時々戦えばいいかな？

…ふう…………。坂本、そして土屋。厄介ねホント。

第十二問 「やらじ」「って簡単に言っけど、言い方によってはいやらしくなるよ」

今回は銀魂風タイトル。

ヒヨウガさん、断空我さん、Dr・クロさん感想ありがとうございます。ごぞい
います。

熱暴走していた前話も全体的に修正し、今回は前回より抑えた且つ理科らしさが出ている回かと。明久から離れると止める人間がないことが判明。

それでは、どぞ！

第十二問 「やろっ」って簡単に言うけど、言い方によってはいやらしくなるよ

「吉井！ 木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテイルを揺らしながらこちらへ駆け寄って来たのは、明久と同じ部隊に配属された島田。ちなみに、きちんと遊撃ポジションは手に入れたわ。

ん？ 明久、どこを……

「ああ、胸か」

「アンタの指を折るわ。小指から順に、全部綺麗に、二度に渡って」
「なら此方は、アンタの肋骨を折るわ。下から順に、全部綺麗に、左右に渡って」

「二人とも痛いっ！ 聞いてるだけで痛い！

そ、それよりホラ、試召戦争に集中しないと！」

今現在前線部隊にいるのは、木下率いる先攻部隊で、明久率いる中堅部隊は、先攻部隊とFクラスの間辺りに部隊長として配置されている。

どうするか模索し、戦場の情報を集めていると、野太い声が聞こえてきた。

『さあ来い！ この負け犬が！』

『て、鉄人！？ 嫌だ！ 補習室は嫌なんだっ！』

『黙れ！ 捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！ 終戦まで何時間かかるかわからんが、たあっぷりと指導してやるからな？ 喜ぶといい』

『ひいつ！？ た、頼む！ 見逃してくれ！ あんな拷問耐えきれぬ気がしない！ いや、耐えられない！』

『拷問？ ハハハッ！ そんなことはしない。これは立派な教育だ。』

補修が終わる頃には趣味が勉強、特技は数解、尊敬するのは二宮金次郎。といった理想的な生徒に仕立て上げてやるう。ほら、見えてきたぞ？ 理想郷はすぐそこだ」

『っ！?!?!? き、鬼神だ！ 誰か、助けっ イヤアアーーッ
ボタン、ガチャ
』

拷問で間違いないわね。洗脳もその一つでしょうし。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん？ なに？ 作戦？ 何て伝えんの？」

「総員退避。と」

「意気地なし！」

「目が、目がああぁっ！」って転げ回ってる。ム カがいるわ。大佐だっただかしら？」

「バルス？」

「チヨキで殴ったね！？ 親父にもぶたれたことないのに！」

そんなご家庭はDVというのよ。

「目を覚ましなさい、このバカがっ！」

酷いわね、こいつ。すっ、と片手を上げた。すぐさま駆け寄り、一人傳く。

「いい？ アンタは部隊長なんだから、臆病風に吹かれてちゃダメ。木下達が点数を補給する間ウチら中堅部隊が、前線部隊に代わって前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げ出したりしたら、アイツらは補給ができないじゃない。ね？」

膝まづいている存在に声をかけた。

「須川亮、だっただわね」

「はっ」

「粉末と練りわさびがあるから」

「心得ております」

「そう。ならば、……やーっっておしまい！」

「アラホラさっさー」

「ごめん、僕が間違ってる……って、理科？ さっきから何を……」に
ぎゃああっ！?!?!?」島田さん！（理科？）」

明久と目が合う。

「明久、タオル。拭いてあげて（こっちは勝手に動くから、後はよろしく）」

頷いた明久に、すぐ行動を開始する。

「手があっ！ 痛えっ!?!?」

クスクスクスクス。あー、面白いわね……須川って。中々に使えるっ。

「須川、手を洗ってすぐ来て頂戴。移動するわ」

「完了致しました」

「1分ほどかしら？ やるわね。」

移動して木下と合流。そして逐次、土屋から戦況報告がメールにてあがってくる。

「阿部、援護に来てくれたんじゃな!」

「木下、報告は受けているわ。木下はついて来なさい、他は回復試験を受けに戻ることに」

『『『イエス、ママ!』』』

敬礼と共に去って行った。

早速、厄介なのがいたわ。

「木下、Dクラスの清水は知っているわね?」

「うむ、知っておる」

「なら話が早いわ。島田の声で且つ遠くから清水の方に聞こえるように感じさせてこの場から離脱させなさい」

「それはちと、難しいのお」

「難しいからといって諦めるのかしら？ あなたの芝居に対する思いはその程度?」

「そんな事無いぞい！　ワシは、ワシの思いは本気じゃっ！　見ておれ」

「ええ、わかっているわ。期待して見ているから頑張ってる」

「もちろんじゃ」

「でも、そういつとこを見るとやっぱり違うんだって思うわ」

「ん？」

「なんでもないわ」

「そうか？」

「んもっ、いいからやって？」

「「っ！！」」

須川も木下も顔赤くない？　くすっ、まあいいわ。

「がんばれ、オトコノコ」

「おう」

「わ、わかったのじゃ」

お互い返事した後、一瞬睨み合ったように見えたのだけれど……
気のせいかしら？

「お前には負けねえっ！」「お主には負けん！」

大変なのね、オトコノコって。

「木下」

「うむ。…んんっ。　美春っ、どっこっ？」

「お姉さまっ!？」

「　ウチは、こっちにいるわ。会いに来て？」

「おんっねえっさまあ〜ん!?!?!」

「「「……………」」」

凄まじいわね……。あ、今のうちに姫路を所定の位置に移動させるよう土屋にメールを……
っと、もう返信？

From:土屋

Subject:了解した

本文:船越女史を呼び出されたが、未到着。明久達の戦況は芳しくない。

「須川、放送室へ行って船越先生の誘導を頼むわ。終わり次第すぐ戻ること。きちんと考えて行動なさい？」

「ああ、任せてくれ。期待に応えてみせる」

「ええ、結果を示して頂戴」

「イエス、マイロード」

須川を見送りながら考えに耽っていると木下から指示を仰がれた。

「阿部よ、どうするのじゃ？」

「ちよつと待つて」

携帯を取り出してコールする。僅か半コールほどでつながった。

ほとんど刹那の間じゃない。

「土屋、今この先にいるのは近衛部隊と代表だけかしら？」

「……いや、それに加えて数名の生徒が残っている」

「おそらく回復試験ね……。土屋、近藤吉宗を含めた3名ほどでいいわ。坂本達にも気付かれないように此方へ寄越して頂戴。それと近藤にスカートの替えが欲しいからそれも持って来させて。後、姫路の準備はどうかしら？」

「……了解だ。近藤を含めた3名を向かわせた。姫路もそろそろ辿り着くはずだ」

さすが……。早いわね。土屋を上方修正しなくちゃ。

そうこうしているうちに姫路が着き、遅れて放送も始まった。

「遅れ、て、すみません」

ピンポンパンポーン

《連絡致します》

「気にしなくていいわ、姫路」

《船越先生、船越先生。す、…須川亮君が体育館裏で待っています》

嘘でも言いたくないのね。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

数学の船越先生（45歳・女性・独身）は、婚期を逃して、終には生徒達に単位を盾に交際を迫るようになった、第一種特定危険人物認定教師らしいわ。

「すごい…ですね、須川君」

「姫路、策のうちよ。これも」

《あ、あなた欲しさに、揉め事が起きそうです。至急、体育館裏までお越しください》

ピン、ポンパンポーン

Dクラスから響こたきが聞こえる。土気が下がったかな？ 土気の上がついているはずのこっちは勢いのままに押し込めることも可能。絡め手として、少数が動きDクラス代表を仕留める。

「え？ ああ。そう、いうことで…すか私は」

「共にAクラス前で待機。木下“さん”と一緒に、今も辛そうにしているあなたの介抱をするから」

「急ぎ来、た為のこれ、さえ利用するんですね」

「いえ、初めからそのつもりだったわよ？」

「へ？」

「開戦した時点でDクラスの敗戦は確定したの。

くすつ。 わかる？」

「ホント、お主には適わんわい」

「来たわ」

「近藤吉宗、只今を持って傘下に入る。それと言われていた物だ」
差し出されたそれを受け取って、木下に渡す。

「それを履いて、Aクラス前へ移動するわ。ズボンには土屋に。後、土屋は余計なことはいらないこと。木下の写真までは許す」

カシャカシャっ！ パシャパシャッ！ 早速、着替え中の木下の撮影。

「これは貸し一つよ？」

「構わない」

着替え終わり頃に須川も帰ってきた。

「遅れたか？」

「大丈夫よ。須川は近藤達と一緒にDクラスを誘きだすこと。場所は渡り廊下に寄りすぎないでDクラスからも少し離れた位置で」

「わかった。近藤行くぞ」

「土屋、体育の大島先生には」

「……声をかけた」

「そ。日本史の」

「……明久のところへ既に向かっている」

「最高ね、アナタ」

「…… カアアアッ ……別に……」

「？」

顔、赤くない？ 少し首をひねった。

木下からは齒軋りを、須川からは舌打ちが聞こえた気がした。戦中だものストレスくらい蓄まるでしょうね。

あ、Cクラスに遠藤先生がいたわね。

「土屋、Cクラスへ行つて」

「……遠藤先生ならさつき声をかけた」

「ホントもう、どうしてくれるのよ？」

「……ん？」

「アナタ無しじゃダメな身体になつちやうじゃない」

土屋が地面に頭を打ち付け始めた。大丈夫かしら？

まあいいわ。遠藤先生も来たみたいだし、作戦開始よ。

手首を上から前へと振つて近藤達を動かせる。

「……打倒Dクラス！」

いい位置取りね。須川よね、確か……？ 使えるわね。あら、今の声でAクラスの数人も気づいたわね。態々見に来る物好きもいるみたい。活発そうな娘ね。

そして、Dクラスが扉を開けると同時に須川達が駆け出した。

こっちも姫路を気にする。

「姫路、大丈夫？」

「少し、楽……になつてきました」

「姫路さん体調が優れないんですか？」

おいでました。

「遠藤先生、そうなんです。授業中に倒れそうだったので、アタシ達が付き添いに」

「あり、がとうござ……います。木下さん、もう少し休んでから……っは、で、構いませんか？」

木下は当然だけど、姫路も中々の演技者ね。遠藤先生がこっちに来る前に息は整っていたはずだったものね。

戦況は…… Dクラス代表は未だDクラス前、少しAクラス寄り。近衛はサイドに展開、残りの雑兵は9人か……。思っていた以上に多いわね。今展開されているのは現国か…… あ、須川のコンビと近藤

のコンビが一人ずつ倒した。連隊2の、遊撃で隠し玉の持つ将が土屋ね。後7人、そろそろ頃合いでしょう。土屋にアイコンタクト。即座に相手のいなくなった土屋は、敵の一人に“保健・体育”で挑む。現国フィールドは崩され、もう一度同じ相手と隣の生徒に保健・体育で挑み、フィールドを形成する。相手が驚いて武器を構え遅れた刹那で相手を屠り、隣の召喚獣の得物を飛ばし切り伏せ30点台にまで落としたところで漸く時が動き出した。

『Dクラス 村上裕也

Dクラス 田淵聡

保健・体育 0点

保健・体育 34点

VS

保健・体育 427点

Fクラス 土屋康太

『Dクラス村上裕也、戦死!』

「……なっ!?!」

戦場にいる誰しもが息を呑んだ。くすっ……。やるわね。

土屋の援護に回れるように点数の振り分けも考えられた編成が須川によって即座に行われ、土屋から5〜6メートルほど下がって左翼に展開するのは須川の連隊、右翼に展開するのは近藤の連隊。土屋(将)を前に出した変型の鶴翼陣。

さあ、どう出るのかしら? Dクラス。Fクラスの将は、手強い

わよ？ ふふっ……

「Fクラス須川亮だ。悪いがおまえらを討ち取らせてもらっ」
棍を持った須川の召喚獣と須川が息を吐きながら構える。

ここで言っちゃダメよね……。今日、無性に言いたいこの言葉。

やーっつておしまい！

策がダメになるから言わないけどね。

「同じく近藤吉宗。代表までの道筋を作る、だからさっさと退け」
近藤が構えをとり、目を閉じていた土屋がゆっくりと瞳を曝す。

「……戦死したいのならばかかって来い。相手になつてやる」

敵方も一斉に構えを作る。土屋の雰囲気呑まれたの？ アレも
充分役者な気がするわね。

「……Fクラス隠密、土屋康太。…推して参る！」

第十三問 文月新聞 『速報！ 勝利の秘訣。 文月編』（前書き）

Dr・クロさん、ヒョウガさん、雄二さん感想ありがとうございます。
ます。

今回タイトルは、『デュラララー!!』の4巻をばけーっと見て書
きました。

そんな感じです。どうぞ。

須川の棒術もさる事ながら、近藤も負けてはいない。何より、土屋が追隨を許さない。…つと、見ている場合じゃあないわね。さつさと決着をつけますか。

「じゃ、行くわよ？」

「うむ、任せるのじゃ」

「はい！ 行きましよう」

疑問符を浮かべて首を傾げる可愛い遠藤先生。その先生の手を引っ張って移動する。

「え？ え？ ちょっと、阿部さん？」

「遠藤先生、そんなに可愛い声を出さないでください。興奮しますので」

「ま、待つてください。私達は年の差がっ」

その前に性別が同じですよ、遠藤先生。

…召喚範囲に捕えた。

「遠藤先生、Fクラス阿部理科と木下秀吉が近衛の二人に英語で勝負を挑みます」

「あ、えと……はい。承認します」

「「試獣召喚！」」

「「「なっ!?!」」」

驚いてる驚いてる 代表も近衛達も透きだらけだわ。ねえ？

姫路。

「くっ!……」

先に立ち直った代表が呻いて後退し始めているが、既に姫路が退

路を絶っている。

「あの……」

「え？ あ、姫路さん。どうしたの？ Aクラスはそっちだよ……？」
パニックになって現状を認識できてないわね。

「いえ、こちらで合っています。Fクラスの姫路瑞樹です。えっと、よろしくお願いします」

「あ、こちらこそ」

「遠藤先生、Fクラス姫路瑞樹がDクラス代表平賀君に英語勝負を申し込めます」

「……はあ。どうも」

「はい。試獣^{サモン}召喚です」

「試獣^{サモン}召喚!？」

平賀がとつさに反応する。何もしなかったら、問答無用で補習室という名の魔女の窠への強制連行だから……

『Fクラス 姫路瑞樹』

英語 403点

VS

英語 119点

Dクラス 平賀源二』

「え？ あ、あれ？」

戸惑いながら平賀は召喚獣を構えさせた。けど、結果は目に見えているわ。

「ごめんなさい、これも戦争ですので」

やわらかい声とは裏腹に背丈の倍はある大きな剛剣を軽々と構え、

その得物に似合わず素早い動きで相手に肉薄して反撃の意図を与え
る刻も無く、一撃でDクラス代表をくだし、この戦の決着とした。
まずまずよ、姫路。

ん、今の結果発表されるみたい。

【Dクラス代表 平賀源二 討死】

「Fクラスの勝利です！」

『『『うおおーっ！』』』

『『『そんなあーっ！？』』』

その知らせを聞いたFクラスの叫びとDクラスの悲鳴が混じり、
耳が痛い。正直勘弁。

「凄えよ！ 本当にDクラスに勝てるなんて！ ……マジか？ 夢
じゃないのか？」

「ホントだよ。これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな。笑いが止まらね
ー」

「俺達勝ち組ってワケだ。坂本雄二サマサマだな！」

「やつぱりアイツは凄い奴だったんだな！ 雄たんは」

坂本をベタ褒めだけれど、ぬか喜びじゃなければいいわね。

「坂本万歳！」

「姫路さんの胸を愛しています！」

「阿部！ 好きだあっ！」

「5度ほど輪廻転生してからなら考えてあげる」

「よしっ！ 約束だ」

……。このクラスにはまともな人間はいないみたい。

それより本気かしら…？ 一度ならず五度までも死ぬるつもり？

その自信はどこから来るの？ …………… とりあえず頑張ってみればいいんじゃない。

代表である坂本を褒め称える声がいちたるところから聞こえる。

坂本の方を見ると、がつくりと頂垂れているDクラス生徒達の奥でFクラスに囲まれていた。

「あー、まあ。なんだ。そう手放して褒められると、なんつーか」
デレているのか、可愛いらしく頬を掻いている姿は見るものを不快にさせる。 に違いない。

「おまえは俺を何だと思ってるんだ」

小声で言っただけだけど、聞こえてた？

「現代に蘇った原人。いえ、現れる人と書いて現人ね」

「なんだそれは」

「むしろ、変人でいいんじゃない？」

「よかねーよ」

「そうよ？ ダメ。変人は天才とも言われるんだからその方達に失礼に当たるわ。だから変態って呼んであげて？ そっちのイメージの方が悪印象だから」

「そんな俺が嫌いだった？」

ノーコメントで。

そのようなセリフを吐いて顔を近づけたりしたら、

「雄二！ 女の子から告白させようだなんて男らしくないよ！！」

勘違いされたわ。

「あーもうっ！ 好きに言ってる。それより、だ」

すうーっと、坂本の目付きが鋭くなった。

坂本の作るうとした空気は読まず、おどけて見せた。

「そんなに気になるんだ？」

ついでに、軽くウインク。

「ああ。気になって仕方がねえ」

「モテる女は辛いわ。って、そんな睨まなくても教えてあげるわよ。

… 全く、我慢の足りない子ね」

くいつと、顎で「いいから話せ」と先を促される。何様のつもりかしら？

「単純なことよ。放課後まで待たなくとも蹴りはつけられる」「なっ!?!」

「どうせズル賢いあなたのことだから、放課後の帰る人に紛れて且つ多対一でDクラス生徒を叩くというか、袋叩く感じ? になつてただろうし、決着つけられるからつけたってことよ」

「だが、不安要素が多かつたはずだ。だから俺は」
続く言葉を言ったのは、明久。

「放課後まで待つつもりだった。でしょ? 雄二」

「…ああ。おまえも見当がついてたつてワケか、明久」

「まあね。雄二の悪度さならこうするかなつて」

坂本のアレは納得のいかない顔というよりは、如何に自分が墮ちたのかつていうのを自覚したつてところね。

ああ、そうそう。続き続き。

「まずは、Dクラスでの点数が高く簡単に排除できる清水美春を木下を使ってFクラス近くへと寄せる。それを明久と島田、両名によつて排除。警戒レベルが上がつて渡り廊下の中程からFクラスまでの道程を進み辛くなつた上に、通ろうとしても明久の召喚獣の扱いによつて通れず、弱つたところをその他共が束になつて潰す。

戦死者が出れば出るほど慎重を期すようになり、進退極まつてくる。Dクラスが最下層のクラスに負けるはずがないという気持ちと、連勝をしているだろう明久の存在がもしかしたら…と思わせる。ここまで整えれば、後は2枚の切札ジョーカーを切つて王キングを潰すだけ」

「ふっ、簡単に言つてくれる。

Dクラス近く…正確にはAクラス前だろうが…ま、その場で油断を誘うということは俺にはできない、おまえだからできた策つてワケだ」

どう捉えるかは坂本の勝手。A、Bクラス戦での戦力にするかもしれない。もちろん出るけど。

……次の相手……ま、Bクラスでしょうね。

Cクラスとは戦わないと予測したのは、おそらくはAクラスに対する当て馬にするだろうから。木下を使ってCクラスは噛ませ犬にされてしまうはずだ。普通に考えれば順に相手して行く力も無いFクラス。だが、試験をさせる暇なく攻め込み、切札の使い所を間違えなければBクラスにも勝てる。それは既に証明されたこと。順に攻め込まないのは次は自分達の番だと悟らせない為でもあるのでしようね。

「さあ？ 木下達だけでもできたと思うけど、自分の見えない範囲を指示しなかったのは坂本じゃない」

「だな。慎重になってたんだろうな。初っぱなからというかこの先も負ける訳にはいかねえからな」

思ってた以上に真剣なのね。……ん？ ああ、戦後処理がまだだったわね。

「話中済まないんだが、いいか？」

「おっ、悪い」

「時間かかるだろうから、クラスを明け渡す作業は放課後で良いか？」

「いや、その必要はない。俺達の目標はあくまでもAクラスなんだよ。だからDクラスの設備には一切手を出すつもりはない」

「大きく出たね？ 坂本代表。でも、それでいいのか？」

訝しむDクラス代表。当然の反応ね。

「もちろん、条件がある」

「一応聞かせてもらおうか」

「なに。そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

Bクラスの室外機……ふーん、そういうこと。でも、その程度のことです速恩を支払ってもらいたくないわね。

「二人共、ちよつと待ってくれる？」

「なんだ？ 阿部」

「どうしたんだい？」

「Dクラス代表、平賀君。あなた方Dクラスには別の機会に恩を返してくれと助かるわ。設備を破壊させる様な無茶はさせないから……それでどう？」

「バツと食いついて来たのは坂本の方だった。あーもうっ。」

「おまえこそちよつと待て」

「順番よ、順番。」

「坂本黙って。室外機を壊さなくても窓を開けさせるなんて容易いんだから」

「っ！？ おまえ、……気づいたのか？ 俺が何をやる気が」

くすりと楽しい音を零してしまう。

「ええ。先ほどの応用かしら？ 土屋と大島先生を使った」

「くっ……誤魔化しは効かねえか。悔しいが、その通りだ。もし、

おまえがそれを可能にするならば俺はそれで構わない。平賀、おまえはどうだ？」

「こちらもそれで構わないよ。むしろ、さっきの条件より飲みやすくなった。……からこそその不安はあるんだけどね」

大丈夫よ、これも一つの予防線だし。

「じゃ、交渉成立かしらね。坂本、後は任せるわ」

「ちよつ、おい！」

無視して踵を返す。

次は、Bクラスね。ん、相手の代表は根本だったか。また面倒な……。この学園に全うな人間はいないのかしら？ っ、学園筆頭がカルルさんだからどうしようもない気もするわ。

ま、阿部理科という存在も世間一般からすれば異常な存在なんですよ。しょうけれども。

とりあえず、情報は強力な武器になるから集めておかないとね。

おっ！！

あ、今いい感じのイメージーションが……さっさと帰って実験しよ。

第十四問 なくしたテガミ（前書き）

なんか、ドイツ語とか使ってますが、文法おかしかったらすみません。

今回のタイトルは、『テガミバチ』。

はてさて、今回も自由な理科。色気ならぬエロ気が……。

第十四問 なくしたテガミ

「たっだいまー」

「じゃないでしょう？ 早く帰りたんだから」

態々付き合ってるっていうのに。忘れちゃうから。

「はやくう、して？」

「ちよっ！？ 理科、待って！ 僕らにはまだ早いと思うんだ！

それに場所だつて、家の方がいいし」

何を言っているのかしら明久は。うちに帰るのなんて当然じゃない。というより、さっきから言ってたつもりなんだけど……伝わってなかったのかしらね。

「よ、吉井君！？ 阿部さんっ」

あら、誰もいないと思っていたけど。後半部分、若干テンションが落ちた気がしないでもないけど、明久と二人でいたってのが気に入らなかつたんでしようし。

「あれ？ 姫路さん？」

「つとどどどどうしたんですか？」

なにやら慌てている様子。何？

姫路が座っている席(?)をちらりと見やる。卓袱台の上には可愛らしい便箋と封筒が置いてあった。

ああ、そゆこと？

「あ、あのっ、これはっ……。これはですね、そのっ」
吃り過ぎよ、姫路。

「うんうん。解ってる。大丈夫だよ？ 誰にも言わないから」

「えっと ふあっ」

コテン、と卓袱台に躓いて転げる姫路。さらには慌て過ぎだから。その拍子に隠そうとしていた手紙が目の前に飛んできて、その一文が目に入る。

《あなたのことが好きです》

たぶん……。けれど応援はできない。翔子にも明久にも幸せになってもらわないといけないから。

飛んできた手紙を綺麗にたたみ、明久が姫路に返してあげてる。

姫路を気遣うように笑顔で一言。

「頑張つてね、僕応援してるから」

「でも吉井君には　さんが…」

今呼んだわよね。

「ん？　どうかした？　姫路さん」

「あ、い、いえっ」

「その手紙」

「は、はい」

「良い返事が貰えるといいね」

「はいっ。…そう、ですね」

姫路は複雑そうな顔を僅かに見せて返した。

朝から船越女史らしい。というのに随分な余裕……。あ、立ち上がった。今度は頭抱えて震え出した。…忘れてたのね。ん？　スゴい勢いで出て行ったけど……

『こらあつ！　貴様、教室に戻らんか！！』

『後生ですから！　今日だけは、今日だ』

『いやああつ！?!?!?!』

『船越先生、教室はこっちですよ！』

両手を合わせて合掌。

「何をやってるの？ 理科」

「須川の冥福を」

「まだ生きていると思うのじゃが…」

「鉄人も苦勞するね」

「ね？」

首を傾げてみた。

明久と目を合わせたがやはりというか落ち着き払っている。ただこくり、と頷き合って意志疎通を終える。長年の付き合いだからこそその応対。

机に突っ伏す須川に声をかけた。

「須川、お疲れ様」

「ああ……。悪いが休ませてくれ」

「はい、コレ」と言っ物差し出す。

「何々だ、コレは？」

「勞いの品よ。大したものではないけど、美味しくいただいて頂戴？」

「もしかして!？」

立ち上がった須川の周りから声も立ち上がる。

『諸君。ここはどこだ？』

『『最後の審判を下す法廷だ!』』

『異端者には?』

『『『死の鉄槌を!』』』』

『男とは?』

『『『愛を捨て、哀に生きる者!』』』』

『宜しい。これより 2 - F 異端審問会を開催する!!』』

『今日の前に原罪を侵した者がいる』

大きく出たわね。

『罪状を読み上げたまえ』

『はっ! 被告、須川亮。(以下、この者を甲とする)は我が文月学園第二学年Fクラスの生徒であり、この者は我が教理に反した疑いがある』

『甲の罪状は女性、阿部理科(以下、この者を美額公とする)から手作りの物品の押収を行った背信行為である。

理解しやすく言いますと、この者は、アダムとイヴアダムばりのきゃっきゃウフフを堪能しようとする目論んでいた疑いがあります』

『御託はいい。結論だけを述べたまえ』

『女子の、しかも手作り弁当をもらっていたので、羨ましいであります!』

『うむ。実に解りやすい報告だ』

あ、逃げた。

『異端者が逃亡を図った! 決して逃がすなあ!』

『『『はっ!!!!』』』』

「くっそおお! 死んでも死守するからなっ!!!!!」
須川も器用ね。是非とも見てみたいものだわ。

「明久、とりあえずお昼にしましょ」

「冷たいよ、理科。態々争いの種を撒かなくてもいいのに……」

「はい、明久。おべんと」

「うん、ありが……あ……、もしかして……。理科、……恐ろしい娘……」

「……うん？ どういうことかしら。」

「ま、いいわ。いつも通り屋上で食べるとしますか。」

「持つよ」

「ありがと」

「そうこうしているうちに屋上へと辿り着いた。」

「ん〜っ。いい天気ねえ」

「思いつきりのびをした。節々が気持ちいいわ。」

「フェンスの前：先客？」

「はろはろ〜。吉井も阿部もこっち座りなよ」

「島田さんに、姫路さんも？ どうしたのさ、みんな揃って」

「本日の戦争の話をするからと思ってたからな。どうせだからメシも一緒になってことになった」

「それにしてもスゴい量だね」

「確かに。半端ない。ナニ？ 重箱って。お正月は数ヶ月も前に終

わったはずだけど。」

「姫路がみんなになってな」

「……かなりラッキー。今日死んでも悔いは……」

「……ない」

「結構あるよね……」

「ムツツリーニがムツツリーニ足る所以じゃの」

「も、もしよろしければ、吉井君も如何ですか？」

「あー、ごめんね？ 姫路さん。今日も理科の弁当があるから」

「そう、ですよ……」

「あーもう……。何でここまで気を揉まなきゃならないのかしらね。明久、少しくらいいたいただいたら？ みんなでってことなんだし」

「んー……、そうだね。じゃあ姫路さん、僕も少しもらってもいいかな？」

「はいっ！ もちろんです！！」

「それじゃ、いただくとするか」

「……俺も」

「二人共フライングじゃないか、パクッ まったごばあっ！?!？」

「明久!?!」

「ホント、行儀の悪 バタン」

「坂本っ!?! irgendwie!?! (どうしたの!?!?)」

「in ruhiger Weise, gesammelt,

gelassen, mit Gleichmut Simada

(島田、落ち着いて)」

ドイツ語で喋る必要はなかったわね。……思わず。島田の動揺が感染したかしら。

明久? 起きたのね、良かつ……何をぶつぶつと……

「川原で石なんか積んで楽しいの? ようし! 僕も手伝ってあげるよ」

「Aufstehen, Aufwachen Puh!, Uff! (起きなさい!)」

島田と同時に声を張り上げた。すると、今度は後ろから、

「……… バタン ……黒の下着も…見たかつ……た」
土屋の最後だった。

仕方ないわ。蘇生の秘術を使おうかな。

「明日、黒の下着を着けてくるから。頑張った人には見せてあげる
倒れていたはずの3人がもそもぞと蠢いた。

「はっ! こんなところまでくたばってらんねーだろ」

「………まだまだ死ぬワケにはいかない!」

「そつだよ。まだ見ぬ明日の為にも負けられないんだあつー!!」
.....大丈夫かしら？

プチップチッ。

「褒美をとらせるわ チラッ」

「くはっ！ ブシャアアアッ！！！！」

「はわわっ!?!」

姫路も島田も何を言っているの？

で、男子はブラジャーがお気に召したのかしら。ん？ なんか..
「やん、パンツ食い込んでる」

「はははっ!?! ブシャアアアッ！！！！」

「阿部!?!?!」「阿部さん!?!?!」

「桃源郷か.....悪くねえ」

「アルカディアがこんなところに」

「.....ザナドゥ、俺は見つけた」

「ここがアヴァロン...ワシも本望じゃ.....」

一人増えているわ。なにそれこわい。

さて。屋上での会話をなんとか終え（死屍累々だったから）、
教室へと戻ると.....。

先に帰ってたはずの姫路の様子がおかしい。何かあったのかしら。
「姫路？ どうかした？」

「え？ い、いえ、何でもありません」

何でもないって顔じゃないけど、本人が言うんだから仕方ないわ。
「そ」と短く返事して手をひらひらと振る。Bクラス戦は目前だ

ってところで不安は抱えたくないんだけど……コレばかりは、もう
どうしようもないわね。

「ふう……」

「どうしたの、理科」

「テスト」

チラリと横目で明久を見やる。

「本気でやるってこと？」

明久の言葉に頷いて、腰に手の甲を当てる。

「そうよ。嫌な予感がするし……、不安要素が生まれたから」

「解った。僕は得意科目だけは全力を尽くすよ」

言葉もなく、首を縦に振るだけ。

席に着いてテストの準備をしながら愚痴を零していた。

「ホント。儘ならないわね、全く」

視界の端に映った姫路の、少し俯き加減なその表情が妙に気にな
り、頭に焼き付いた。

第十五問 青い春。初春は関係ない。（前書き）

初春は、『とある科学の超電磁砲』。
今回は色々ってか理科のターン。

第十五問 青い春。初春は関係ない。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立つた坂本が机に手を置いてみんなの方を向いている。きつと阿部理科という天才の背中も見えているはずだ。顔じゃなく背中というのがポイント。しかも後ろの席(?)だから誰もいない空間が広がっている。

「どれだけ坂本の話の聞く気が無いのかという」と

「ああ、よく伝わっているぞ、阿部」

「やめてっ！ 想いが伝わっているだなんて勘違い……………ストーリーカー……………」

「なっ!?! 違っ!」

「諸君。ここはどこだ?」

『『『最後の審判を下す法廷だ!』』』

『美少女がストーリーカーされているみたいなんだが、どうすればいいと思う?』

『『『死刑!』』』

『よし、解った。坂本、死刑!』

『『『ヒヤッハアアア!!!』』』

執行までの早さが有り得ないわね。とりあえず……………
美少女祈禱中?…

猿共戦闘中…

「はあはあっ……少しは熟考しろ！」

とにかく、午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分みたいだな」

お茶を飲み終わっても続いてたけど、漸く終了。

『はあっはあっ…、おうよ！』

一向に下がらないモチベーション。Fクラスの武器の一つね。士気は結果に影響されることもしばしば。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない、解るな？」

『おおーっ！』

本当に理解してるのかしら？ 適当に返事してない？

「そこで、前線部隊は姫路瑞樹に指揮を取ってもらう。野郎共、きつちり死んで来い！」

「が、頑張ります」

ムリに乗ってるってわけでもないのかな？ 周りに必死で合わせようとしているようにも見えるけど……

『うおおーっ！』

「……………はあ」

前線部隊の叫びに紛れるほどに小さなため息。

姫路の事みんな気づいてないみたいだけど、明久も気づき始めているわよ。

何より、陰りが見えるのよね…あの笑顔。

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。これでいよいよBクラス戦開始だ。
「よし、行ってこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエツスアー』

敵を教室に押し込むのが目的なので、とにかく勢いは必要になる。今回の此方の主要武器は数学。Bクラスは比較的文系が多いのと、なぜか長谷川先生は召喚可能範囲が広いというのが理由。他にも英語のライティングの山田先生と物理の木村先生もいる。理数系メイン。まさしく独壇場。

「いたぞ、Bクラスだ！」

開戦の声を背中に受けながら布施先生を伴って階段を降りていく。渡り廊下の中ほどまで来たところで、前から二人の少女と西村先生が歩いて来た。

「あなたが…阿部さんね？」

「さあ、知らないけど？ 何方かと勘違いなさっているんじゃない？」

「白々しい。西村先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス阿部理科さんに総合科目で勝負を申し込みます！」

どの阿部さんと呼んだのか知らないから、別の誰かと勘違いしているのでは？ という意味合いを込めて言ったのだけ。

「別ルートには、鉄巨人が配置されているだなんてEXステージ突入。って？」

「何を訳の解らない事を……」

相手の目を覗き込んで言う。

「ねえ。階段のところにも配置しているんでしょう？ 呼んだら？」

「はい？」

先ほどよりもさらに声色を低くする。

「呆気なく散りたいの？」

その言葉に反応してか、それとも、岩下つてのがびくつと慄き始めたのがきっかけか……

「律子、私も手伝う！」

階段の方から一人駆け寄って来た。

さあ、

「戦いましょう？ 楽しいことは、これから始まるわ」

「……試獣召喚！」^{サモン}「……」

喚声に応えて魔方陣が展開。

敵の二体は、フランベルジェという波状の剣を持った岩下とギサルメという斧槍を体勢低く構えた菊入。

相対する召喚獣は、バンドをした髪に白衣と実験用滅菌手袋を装備したどっからどう見ても科学者然としたいつもの姿。それに加え、目につくのが、手首に巻かれた腕輪。

「そ、それって!？」

「私たちが勝てるわけじゃないじゃない!」

「努力をすれば、届くかもしれないわよ？」

『Fクラス 阿部理科

総合 5051点

VS

総合 2063点
総合 1889点
Bクラス 岩下律子
Bクラス 菊入真由美

「ちょっと待ってよ!? 何、その点数っ!」

「律子! 落ち着いて! とにかく戦わないと」

「えいつ」

召喚獣がチビ菊入の口内に黒い丸薬を放り込む。

「えっ?」

爆発。

「ええーっ!?!」

点数は一気に1000は削った。

さすがに内部破壊は強力ね。けど、口内に入る程度の薬品じゃあの程度か。

二体いるし、腕輪で一気に片付けるかな? 消費が大きいから気をつけないと……。あの先と…、さらには近衛の排除。

すっ…、と。一人、召喚範囲の外側ギリギリに立った。

「面倒ね、かかってらっしやい」

「それが終わったらな。」

「ったく。根本の言った通りか。厄介だな」

根本って確かBクラス代表、よね。……時間稼ぎ? それほど警戒されているってこと? 情報は漏らしていないはずなんだけれど

あ。去年の事を知っているってこと? それとも翔子との関

係性から？ どちら共確証は得られない。ん〜……………

「とりあえず、目先の目標を駆逐するか。」

フレイムスロアー

【火炎放射】」

キーワードを紡ぐ。

この武器の点数消費量500点。中距離武器っていうか兵器。放ち続けている間1点ずつ消費していく。当たるとダメージ+火達磨になって相手にダメージを与え続けるもので、短期決戦には持つてこいんだけど、明久並に操作の上手い人だと避けられて此方がキツイ、使い辛い兵装ね。

この腕輪の能力は、科学・化学の武器、兵器を生み出す力。

何そのチートって思ったヤツは大間違い。使う兵器、使う兵器にデメリットがもれなくついてくるワケ。腕輪を使わない方が強いけれど、それはカヲルさんとの契約に違反するからね。

「ハア……………」

「真由美、行くわよ！」

「ええ！」

早速の弊害。なんて面倒くさい。思わずガシガシと頭を掻いた。デカくて重そうな【火炎放射】のせいでさっきよりも動きが鈍くなっているのだ。

岩下の召喚獣が右から回り込み、菊入の召喚獣が左寄りに真っ直ぐ突っ込んで来た。

よくコンビを組んでいるのか、他の人間よりも操作が上手い。

が、明久や翔子の攻撃を捌いているので、捌けない事もない。けど、近接戦闘が得意ってワケでもない。

「当たれえっ！」

剣が奮われる。大振りな袈裟斬りから、刃が股下の地面にぶつかつて跳ねた反動を利用し、そのまま地から天へと真っ直ぐに斬り上げた。

「イヤ、よ！」

何とか避けられたところで、

「このっ！」

菊入が、視界外から左膨ら脛を貫いた。岩下に集中し過ぎたっ。

「くっ！……」

フィードバックの事を忘れてた。ちりちりと痛む。激痛は無いけれど、指にトゲが刺さった時のような痛みが攻撃を受けた箇所にある。

ただの刹那、思考が乱れた。

その僅かな透きを逃すまいと、岩下が突きを繰り出す。難なくそれを躲した瞬間……

「もらった！」

声と共に気がついた。“躲させた”んだと。

脇腹辺りにある剣を、咄嗟に右手で抑え込もうと刃に手を伸ばした。と同時に上体は、軌跡を描くであろう場所を予測して無理矢理体を反らして急所を遠ざけた。それでも、

「っあアッ!？」

焼けるように右腕の内側が痛んだ。

さっきよりもフィードバックが大きい！

腕を一本持つてかれた。

受けるダメージによってフィードバックも変わってくるの？

「ハア、ハアッ……」

もしかして、疲労も？ 体力が落ちて防御力も下がるって？ 冗

談じゃない。

「……遊びは終わりよ」

刺さった槍はそのままに、斬り上げ終わっていない状態の剣の下を潜り抜けざまにシリンドラーを地面に叩きつけ、槍を離そうとしない菊入を岩下へとぶつける。

で、碎けたシリンドラーに入っていたのは、気化性爆発物。さあ、避けられるものなら避けてみなさい。

振り返りながら左に抱えていたそのトリガーを引く。

「灯蛾の如く燃え尽きなさい」

「ちよつ!?!」

「そんなっ!?!」

「答えは聞いてない。バイバイ」

一直線に火線が伸びる。途中から二体を包み込むように炎が動いたのは、気体に触れたせいね。

爆炎が包んだ。

渡り廊下の窓ガラスを揺らす轟音。

「「キヤアアツ!!!」」

さらに二人の近くまで炎が迫っていったんだもの、悲鳴を上げるのもムリはないわね。

『Fクラス 阿部理科

総合 1473点

VS

総合 0点

総合 0点

Bクラス 岩下律子

Bクラス 菊入真由美
』

油断してた。何処かで見下してたのかもしれないわね。

岩下と菊入に手を差し出した。

「あなた達かなり強いわね。Aクラスにも通用するわよ?」

「お世辞でも嬉しいかな」

「そうだね」

順に握手を交わす。それと訂正も。

「お世辞なんかじゃないわ。さっきの点数見たでしょう？ あなた達は、それだけスゴいの。だから、勉強ももうちょっと」

「努力をすれば、届くかもしれない？」

「真由美、それって……」

「うん。さっき阿部さんが言ってた言葉」

そこまで思ってたわけじゃないのにね。頑張ってたほしいとは思ったけど……。

「過程があるからこそその結果。努力無くして成果無しよ。」

ま、頑張んなさい」

「「はいつ!!」」

何だか……

「青臭い上に照れ臭いわね」

「あははっ、そうかも」

「ふふっ……。いいと思うけどな、十代なんだし？」

青春？ まあ、悪くは無いかもね。

「そうね」

「じゃ、私たち補習だから」

「またね。阿部さん、頑張って」

「お互いに」

第十六問 おっぱいリロード！ できるほど胸は無い。（前書き）

知つとるかなあ？

『閃光のグレネーダー』って。乳揺れ激しいヤツ。

女性の銃使いが主人公。

今回も理科様頑張ってます。タイトルもつけた理由が解るかも。

第十六問 おっぱいリロード！ できるほど胸は無い。

別れて残ったのは、3人。

「第二ラウンド開始だ。西村先生、野中長男が総合科目勝負を申し込みます！」

全く、儘ならないわ。

「勝負を受けないのか？」

「「受けます！」」

「へ？」

自身でも驚くくらい間抜けな音が漏れ聞こえた。

「Fクラス須川亮が総合科目勝負を受けます！」

「承認する！」

「「サモン試獣召喚！」」

『Bクラス 野中長男

総合 1943点

VS

総合 863点

Fクラス 須川亮』

「アンタ、いつの間に……」

「ここはいいから、坂本達と合流してくれ」

「ええ、解つ p r r r r……」

「こんな時に……。土屋？」

「もしもし？」

『……早速で悪いんだが、阿部。教室がめちゃくちゃにされてペンなどもほとんどない。回復試験に支障が出そうだ。』

『そのタイミングでCクラスにも動きがあった』

「チツ！……やられたわ。悪いけど、点数が半分以下に減らされてさらに勝負をする羽目になるところだったのよ。まだ戦えるけど、相手によつては厳しいわね」

「どうする……？ このまま突き進むか？ にしても、こいつ

は目障りねエ。

『……阿部、さらに悪化したようだ。島田が人質にとられた』

「は？」

「どういうワケよ！ 明久に頼んで……。つく！ それを利用したか、根本。」

「島田を釣つたのね？」

『……おそろくな』

「気づいてたの？」

『……島田の情報を照らし合わせての予測だ』

「さすがね。予測が立てられるだけの情報を手にしているってワケね。」

「十分に称賛に値するわ。情報は武器だもの」

『……四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し、再戦。その間は試召喚戦争に関わる一切の行為を禁止するということになっ』

「待って」

「目頭のところをゆっくりと揉み解しながら思い出し、思考する。」

『 何だ？』

……………！　そうか、そういう……………。

「土屋。さっき言ってたCクラスの動き、このタイミングだと漁夫の利を狙っているようにも見えるけれど、おそらくはそれ事態もブラフ」

『 ……何？　つまり、Cクラスもグルだということか』

「ん、そうね…。情報が足りないからまだ予測の範囲内から出ていないんだけど、停戦協定の内容にある“その間は試召喚戦争に關わる一切の行為を禁止する”というのを利用してくるんじゃないかしら」

『 ……そうか。…Cクラスと根本との関連性を洗ってくる』

「坂本の方は、任せなさい」

プツツと電話が切れた。

「須川、生きてるわね？」

「ああ、さすがにヤバいがな」

「上出来よ。」

布施先生、Fクラス阿部理科がDクラス野中長男に化学勝負を挑みます

「承認します」

総合科目フィールドを消してから、再度化学勝負を挑み、フィールドを再形成する。

「試召喚サモン！」

『 Bクラス 野中長男』

化学 145点

VS

化学 41点
化学 276点

Fクラス 須川亮
Fクラス 阿部理科

「なっ!?!」

「10秒よ」

少ない点数だろうが腕輪は健在だった。使いどころによっては最強にすらなる非^{アブノーマルス}普遍兵器。

そして言霊を発する。

「Desert Eagle .50 Action-Express」

左手に握られたデザートイーグルは、50点消費、50AEの弾丸は最高7発装填の1発30点消費。これだけならば、威力も申し分ないのだけれども、反動がかなり大きく致命的な透きができる為味方がいない時には使い勝手が悪く弾補充の度に点数消費する上、装填中は両手が塞がるのでダメージのある攻撃はできない。というよりは、不可能に近い。自身の透きもできる為、できるだけ距離を取りつつ装填と回避に専念といった感じになる。

射撃をする時は、きっちり姿勢を取らないと倒れたりするので姿勢を正す必要があるのだが、その為に射線は読まれやすい。よしっ。

今回装填したのは2発。止めは須川に任せればいい。

姿勢を正して銃を構えたところで目配せをする。こくり。と頷いたのを確認した。

「くそっ! 行くぞ!」

駆けて来る野中に、装填しながら笑みを深めた。

「Go ahead . Make my day .」やればいいわ。

ほら、楽しませてちょうだい」

ズドン！ という音がしっくりくる重い銃声。

1発目で武器を弾き、反動を抑えつける。フィードバックで自身
が倒れそうになるのを踏ん張って耐える。

2発目で胸を撃ち抜く。反動を無理矢理抑えて連射したせいだろ
う。急所から大きく外れてしまっていた。それでもダメージは高く、
僅かだが点数が残って、消滅せずにふらついた。

その体勢のまま武器を投げつけてきたが、

「つらあ！」

須川が叩き落とした。

そして透かさず、須川が胸の傷口に突きを入れて、くの字に折れ
曲がったところを思いつきり顎を搗ち上げ、

「止めっ！」

がら空きになった喉めがけて全体重を乗せた棍を振り下ろす。

「野中長男、戦死！」

その言葉を聞く前に既に駆け出していた。

Cクラスの前にいる坂本に追い付いた。はあ、っ、何とか間に合
ったわね。

「おう、ナイスタイミングだ。これからCクラスに」
坂本のセリフを手を前に翳して遮った。

「はあはあ……、待ってなさい」

すうーっ、ふう〜。少し動悸が治まった。

「俺達はこれから」

「それを待ちなさいと言っているの。」

ふうっ……、明久はまだ困かしら」

「そうだ。…で、阿部。何を待ってんだ？」

「…待た、せた……」

「康太？」

珍しく息を切らせている土屋に何事かと坂本は顔を顰めていた。

「他のクラスの前で何を騒いでるの？」

教室から出て来たのは、混じりけの無い黒髪をベリーショートにした気が強そうな女子　　Cクラス代表、こやまゆづか小山友香じゃない！

「くっ！」

思わず呻いてしまった。僅かに表情を歪ませた土屋も、急ぎ携帯でメールを打ち込んでいた。

態々向こうから出向いて来たのだCクラスの代表が。

土屋の合流を知って強引にでも持つていくつもりか？

「ちようど良かった、Cクラス代表に話があつたんだよ」

「坂本！」

少しは、聞く耳を持ちなさいよ！

「何の用かしら？」

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

このバカ！　神童は、過去の栄光じゃないつ。

「クラス間交渉？　ふうん……」

「ああ。不可侵条約を結びたい」

辺りを見回すと何人かがCクラス近くで談笑して此方を伺っているようだった。最近ではプロとも張り合えるくらいになった身としては、嗤えるくらいのレベルね。

ま、とにかく坂本を前に出過ぎないように注意して、

「廊下じゃあなんだし、とりあえず中に入ったら？」

不味い。

談笑している奴らの口角がいやらしく釣り上がったように見えた。そうこうしている内に坂本が教室へと入って行った。

小声で近くにいた須川に話しかける。

「須川、入口を確保していてちようだい。おそらくヤバい状況よ」

「解った」

「存外頼りになるわね。坂本よりよっぽどマシよ?」

「ならば、今度はこっそり弁当を頼む」

クスツ。

少し頬を紅潮させて些かばかりか外方を向き、それでもきつちりと伝えてくる。そんな可愛らしい姿に再びクスツと、つい綻んだ。

「いっぱい頑張ってくれてるからご褒美としてあげるけど、最後まで油断せずにきつちりとね?」

「任せろ」

須川は、どん! と胸を叩いてアピールする。

「土屋には、制服とは別に撮りたいと思う衣装を一着ならば撮らせてあげる」

グイツと親指を立てて命を滴らせる。今から出してどうするのよ。

「鼻血は拭いておきなさい。因みに、解っているとは思っけど、Bクラス戦終了してからの契約執行だから」

「もちろんだ」

今が一番輝いてない? いいんだけどね。

「…で。土屋、援軍を呼んでいたのでしょうか? アナタ」

「…… こくり ……間もなく到着の手筈」

「そ。解ったわ」

二人の目を覗き込んで頷き合い、Cクラスへ入った。

「で、何だったかしら?」

「不可侵条約だ」

「そうだったわね」と外にいた奴らと同じ、いやらしい笑みを浮かべた。

やはり。と思った時には坂本の手を取っていた。

「お、おい。何を」

「仲が良いのね。二人は」

「違えよ！ こいつが勝手に」

「それにしても……不可侵条約ね……、どうしようかしらねえ、根本くん？」

「なっ！？」

坂本が驚いて見下ろして来る。先ほどからの行動に納得いったのだろう。けれど、遅い。後手に回ってしまった。

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

奥から取り巻きを連れて現れたBクラス代表、ねむやまみづじ根本恭二。同時に入口からも声がした。

「阿部っ！ 取り囲まれるぞ！」

廊下の奴らが動いたみたいだ。

「酷いじゃないか、Fクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を一切禁止にしたよなあ？」

坂本が自身の迂闊な行動に下唇を噛んでいた。

「先に協定を破ったのはソッチだからな？ これはお互い様、だよな！」

根本が告げると同時に取り巻きが動き出す。さらにその背後からは、先ほどまで戦場にいた小柄な数学の長谷川先生の姿が隠されていたらしく、

「長谷川先生！ Bクラス芳野が召喚を」

「させるか！ 須川が受けて立つ！ 試獣召喚！」

瞬く間にこの場は戦場と化した。

須川のファインプレーにウィングをして、そのまま手を引いた。フィールドから出ないと何度だって襲われる。

「悪い！ 後は自分で走れる」

「…阿部！ 道は確保している。さっさと下がれ」

さすが土屋。

「康太、助かる」

「ねえ、明久は？」

「…援護に来た」

「なら、坂本つ。姫路は任せるから、殿しんがりは任せなさい」

「すまない。行くぞ、姫路」

「ひゃあつ!?! 坂本君!?!」

「悪いが時間が無いんだ。嫌かもしれないが我慢してくれ」

「で、でも……………お、重くないですか…?」

坂本は、おかしそうに笑い飛ばす。

「はっ。全然だ。寧ろ軽過ぎてちゃんと食べているのか心配になるくらいだぞ?」

「イチヤイチヤしてないで早く行ってくれる?」

「「イチヤイチヤなんかしてねえ(してません!)!」」

仲の宜しいことで。

じゃ、そろそろ時間稼ぎも充分かしらね。

「頭つ!?!?!」

「え? 何だ?」「!?!?!?!」「何、どういうこと?」「どうしたんだ?」

一人を除いて、疑問顔の一同。

古典の竹中先生は、挙動不審に目玉をキョロキョロと忙しくしていた。知っている生徒は他にいないと踏んだ竹中教諭が視線を合わせて来たので、ジェスチャーをする。頭の方に手を持っていつて両手を前後左右に揺らしてみせた。

「ひうっ」と微かに息を飲む音が聞こえてきた。それだけできつと理解してくれたのだらう。お礼を言わんばかりの安堵の相好を見

せた。こういう時女で良かったって思う。男なら、恨みを買っに違いない。

「少々席を外します！」

チャーンッス！

勢い良く手を上げて号令を出す。

「総員退避っ！！！」

教室へ戻る道すがら、明日の決戦に対して今日以上に詰めよつと思つた。

本日の敗因は、Bクラスを下に見ていたこと。

自身の慢心に足下を掬われた結果に終わった。

第十七問 善悪の彼岸（前書き）

断空我さん、Dr・クロさん、ハンタータカピーさん、暮灘雪夜さん感想ありがとうございます。

今回のタイトルは、

『ゼノサーガ？ 善悪の彼岸』から。

銃キャラであるJr.も言う「go ahead・make my day」は、ダーティハリーっていう古い映画の有名なセリフ。そして使っている銃がS&W M29の44マグナム弾。なのです。

後、今回の理科は、連合軍第501統合戦闘航空団「STRIKE WITCHES」（504でもいいけど）とか、伊隅戦乙女中隊とか、第13航空団ソニックダイバー隊とか、帝国華劇団とか所属してもいいけそう。

知ってる作品ありました？ 答え合わせは次回。

第十七回 善悪の彼岸

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝、登校してすぐに坂本から開口一番にそう告げられた。

ふあ〜っ……、んっ……眠いわね。

「理科、大丈夫？」

「ええ、悪いわね」

「おい、おまえら。作せ」

「大丈夫。予想がつくから」

「ぐっ…！ ならば言ってみる」

「あらあら。頭が固いんじゃない？ ま、お望み通りにしてあげる。明久が。」

「作戦っていうのは、おそらくはCクラス相手のもの。」

その表情を見る限り、間違いじゃなさそうだね」

坂本は、苦々し気に「ああ」と呟いていた。全く。どうしてこうも素直になれないのかしら。

「Cクラス？ して、何をするのじゃ？」

「まずは、秀吉のお姉さんの優子さんの姿に変装する」

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

男として見られるつもりは無い、と。

「木下優子さんになりきって、Aクラスの使者を装ってCクラスへと行ってもらう事になるかな」

「どうかしら、坂本？」

「相違ねえよ」

不貞腐れないの。あなたが堕ちた事実に変わりは無いんだもの。

「と、いうわけだ。秀吉、用意してくれ」

「う、うむ……」

坂本が“自身”の鞆から取り出したのは、この学園の女子の制服。大丈夫よ。引いたりしないわ。いつでも迎撃準備は万端だから。木下がその場で脱ぎ始めた為、明久に目を塞がれた。気にしないんだけど？

「……………！！ パシャパシャパシャパシャッ！」

指が擦り切れるんじゃないかというくらいの凄い速さでカメラのシャッターを切る様は、ムツツリというよりは寧ろオープンよね？ムツツリー二という真名は返上した方がいいんじゃないかしら。

「よし、着替え終わったぞい。ん？ 皆どうした？」

「さあな？ 俺にもよく解らん」

「おかしな連中じゃのう」

オマエモナー。

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

あ、そうだ。メールしとこつ。…………送信つと。

計画は、着々と進行中。あとは結果を御覧じろ。ってね？

『静かにしなさい、この薄汚い豚共！』

酷いってレベルを超越してない？

「流石だな、秀吉」

「入っていきなり暴言吐くなんてめちゃくちゃだけど、これ以上ない挑発だね…………」

甘いわ。これから、抑えるんだから。

『な、何よアンタ！』

『小山さん、話かけないで！ あなた豚臭いわ！』

「酷つ！？」

そう仕向けたのは誰よ。

『アンタ、Aクラスの木下ね？　ちょっと点数が良いからっていい気になってるんじゃないわよ！　何の用よ！』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ学園内にあるだなんて我慢ならないの！　解る？　貴女達なんて豚小屋で充・分だわ！』

『なっ！　言うに事欠いて』

来た！

「失礼します」

「翔子！？」

『っ！？　だ、代表、どうしたんです？』

声が上ずってるわよ。木下。

『優子こそどうしたの？』

『Aクラス代表の霧島さんね』

『…そう。Aクラス代表霧島翔子。お邪魔してる』

『あなたも、私達にはゴミ溜めがお似合いだともいいに来たの？』

『…ゴミ溜め？』

『巫山戯てんの！？　Fクラスに決まってるじゃない！』

『……………。Fクラスをバカにしてる？』

声のトーンが2段階は下がった。視線も冷たくなった。

明久と目が合い、「あーあ」と小さく零す。

『バカにしてるも何も事実でしょ？　Fクラスには屑やゴミが“ある”っていうのは』

『…………科には感謝する』

使ったようで悪いとは思っけどね…………。

『何？　まだ何かあるの？』

『ある』

凄く怒っているわね。アレは。

『…Aクラスは、Cクラスに試召戦争を申し込む！』

「ドアと壁をうまく使っくんじゃ！ 戦線を拡大させるでないぞ！
そこ！ 危ないぞい！」

木下の指示が飛ぶ。

あの後午前九時よりBクラス戦が開始され、Fクラスは昨日中断されたBクラス前の位置から進軍を始めた。

窓からの奇襲の為、坂本は「敵を教室内に閉じ込める」という号令を出していた。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！ 補給も念入りに行え！」

副司令の木下は、問題無いわね。

問題は、司令官であるはずの姫路ね。昨日の午後から姫路の様子がおかしい……。

「……………あ……」

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む！ 誰かつ！」

「姫路さん、左側に援護を！」

「あ、そ、そのっ……………！ あっ……………」

ちっ！ 姫路。…仕方ない。

「阿部理科が受けます。」

姫路！ 何もする気がないなら退きなさい！ 邪魔で迷惑よ！

「す、すみません……………阿部さん。次こそは、私が行きます！」

そう言っって姫路が戦線に加わろうと駆け出した。が……………

「あ……………」と小さく漏らした後、急に動きを止めて俯いてしまった。

ダメね。

「明久っ、…明久……………」

明久が怒ってる？

つい、と明久の視線を辿って理解した。

「くくっ…」といやらしく笑う根本が目についた。その手には手紙らしき物があるわ。おそらく昨日の午後の時点でか。

「……なるほどね。そういうことか。理科、潰すよ」

「ええ、潰しましょうか。表は引き受けるから」

「うん、横つ面に食らわせてやるよ」

「姫路は、後ろに下がってなさい」

「……はい、すみません」

「あさ、姫路。こついう時はさ、“ありがとう”なんじゃない？」

「！ はい！！ ありがとうございませす！」

素直でよろしい

ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！

『あー？ 何々だよさつきから』

そろそろ頃合いかしらね？

「須川、近藤。頼むわよ？」

「「ああ！」「

『おまえらしい加減諦めるよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての』

『どうした？ 軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？』

『はア？ ギブアップするのはそっちだろ？』

『無用な心配だな』

『そうか？ 頼みの綱の姫路さんも、隠し珠の阿部さんもどうやら調子が悪そうだぜ？』

そう。卑怯なことに、動いたら手紙をみんなの前で読み上げるなどほざいたのだ。

『……おまえら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ』
さ、Fクラスにガソリン……いや、二トロを注入よ。

『けっ！ 口だけは達者だな。負け組代表さんよお』

『負け組？ それがFクラスのことなら、もうすぐおまえが負け組代表だな？ 根本』

教室内の声を聞きながら呼び掛けた。

「FFF団並びに神風隊の者達に告げる」

『『『何だ何だ？』』』

「Bクラス代表根本は、異端者である！」
びくつ。と一斉に反応して眼窩を暗くする。

『『『詳しくご説明を』』』

「まずは、Cクラス代表の小山友香と付き合っているという事」

『異端者だ！』

『制裁を！』

「静まれ！ それだけではないの。姫路の大切な物を奪い、今なお脅しつけこの場から遠ざけている事実！」

『『『何イツ！？』』』

猛る炎の勢いを緩めない為の火種を放る。

ぎゅつと自身の体を抱き締め身震いして見せた。

「しかも……汚され……ちゃっ、た」

「けつ。言ってるバカが。どうせもうすぐ決着だ。おまえら、一気に押し出せ！」

「おおおおおっ！！！！」壁から地鳴りのように声が響いた。

「……態勢を立て直す！ 一旦下がるぞ！」

それを聞いた坂本が退却する。

「おいどうした、散々ふかしておきながら逃げるのかカス共！」

「あとは任せたぞ、明久」

「だああーっしやあーっ！」

雄叫びを上げて飛び込んで来た明久とほぼ同時に兵を動かす。上げていた腕を勢いよく振り下ろした。

「ヤツらを喰らい尽くせえっ！！！」

「ウオオオツ！！！！！！！！！！」

やべっ、楽し過ぎるコイツら。

「ンなっ！？」

すぐ隣の壁が壊れたことに驚いて引きつった顔の根本。

向こうの戦力は、坂本率いる本隊を追って教室から出て行った。

坂本の本隊には、近藤と十名ほどつけたから安心してられる。

「っ！ と思ったんだけど、坂本を追いかけて行く先頭の二人と目が合った。 岩下と菊入だ。

他の人間が二人を守り、坂本までの道程を作っていく。

やるわね。岩下が指示を？ 時間が無いわ。

「くたばれ、根本恭二いっ！」

「Bクラス野中長夫が世界史で吉」

「させないっ！ Fクラス島田が」

「Bクラス山本が受けます！ 試獣召喚！」

「世界史で、吉井明久に勝負を挑みます！ 試獣召喚！」

「くっ！ 近衛部隊か！」

「は、ははっ！ 驚かせやがって！ 残念だったな？ おまえらの奇襲は失敗だ！ つほ？！ ごほっ！ 何だこの煙りは！？」

油断大敵。

「窓を開ける！ つがはっ！」

それを教えてくれたのは……

ダン、ダンッ！

保健体育担当教師の特性は、教科担当が体育教師であるが為の並外れた行動力。

「…… Fクラス、土屋康太」

「き、キサマ……！」

「…… Bクラス近衛に保健体育勝負を申し込む」

「は？ バツカじゃねえの！？ 勝負を見誤ったな！」

「ふっ……」とニヒルな笑みを零し、いつの間にか根本の懐に入り込んでいた。さらに取ったことを気づかせることなく根本の眼前で手紙を一瞬だけひらひらとさせて、土屋は先ほどの根本の動作を辿る。「くっ……」という笑いも忘れずつけて。

「ムツツリーニイーツ！」

近衛も隠し珠も全て剥がして丸裸の根本。

「油断大敵よ」

それを教えてくれたのは……

「あなた達だったのにな。」

試獣召喚

けど、惜しかったわ。岩下律子、菊入真由美。

「負けるかよ！ Fクラスのキサマらなんぞにいいっ！！」

今回出したのは、S & amp; W M 29 の 44 マグナム弾（直径 11.2 mm）。リボルバー式のダブルアクション。本来は狩猟用に開発された物で、威力は折り紙付き。最高の威力の座は 50 A

E弾などに譲ったが、未だに使われる至高の一品。

「ha! you've got to ask one question:” Do I feel lucky?” Well do ya, punk!”(はっ。じゃあ、賭けてみたら、“今日はツイてるか?” どうなんだクソ野郎!)」

言葉と共に放ったが、

「くうっ!」

弾かれた! 腐ってもBクラス代表かつ!

しかも、フィードバックで態勢が

「焦っただろ、今」

「え?」

「前見とけ、阿部」

召喚獣も含めた両方を須川が支えてくれていた。

「なかなか素敵じゃない。いい男よ? アナタ」

「ありがとよ。っていうか、ダーティハリーの真似事か? 昨日も言ってたろ」

「あら、その年で知ってるのね」

確か、1971年の映画だったはずだけど。

「人の事言えんだろ」

「ま、いいじゃない。」

それよりも……そのまま支えてなさい。片付けるから」
「解ったよ」

銃を構えて、

「are you happy? もし幸せだったのならごめんなさいね。」

アナタに不幸を届けに来たわ」

戦争を終わらせるべく、引き金を引いた。

もうこの時くらいだったのだろう。アイツに目をつけられていたのは……………。
後から思い返して、そう思った。

第十八問 サムライがいる。合言葉は『油断大敵』（前書き）

今回ののは、

『百花繚乱 SAMURAI GIRLS』ってヤツです。

前回の答えは、ストライクウィッチーズ、マブラヴオルタネイティブ、スカイガールズ、サクラ大戦。知ってるヤツありました？
因みに、「アナタに不幸を届けに来たわ」ってのはブラックキヤットイメージ。

そして今回活躍は、Bクラス！？

第十八問 サムライがーる。合言葉は『油断大敵』

「くくっ……」といやらしく笑う私達のクラス代表の根本が目についた。その手には手紙らしき物がある。

あれって……………。

視線の先を辿って解った。姫路さんが泣きそうな顔で俯いている。コイツっ……！ ギリッ！ と歯を噛み鳴らしていた。

「律子、落ち着いて。阿部さんの言葉忘れた？」

「え？」

ドンドンドンツッ……！！

さつきから壁が叩かれてる。私達までアイツとおんなじに見られるなんてって思ったら気持ちが沈んでいく。

そんな気持ちを断ち切るかのように真由美が真っ直ぐ見つめて喋った。

「努力をすれば、届くかもしれない」それと、「過程があるからこそその結果。努力無くして成果無し」

うん、覚えてるよ。昨日のことだし、中途半端なところで諦めていた自分に檄を入れてもらったんだからね。

「次のBクラス代表になればいいんだよ。ううん、目指せトップ10入り！」

ふふっ。

真由美にも元気もらったね。真由美の手に軽く音を鳴らしてタツ子。

「ありがとう」

そのまま手を取って駆け出した。

私達が駆け出したのと壁が壊され、壁向こうと教室の外からFクラスが傾れ込んで来たのはほとんど同時だった。

なんか、阿部さんの言葉を思い出して、予感？ 上手く言えない

けど思ったの。阿部さんならこのままじゃ終わらないって。

それに、言ってた。私達は後一步だったって。

考える！ 行動しろっ！ そう意識したら、駆け出してた。

号令を出しながら進んで行った時に、最初はなからそこにいるんだという事を知ってたみたいに人波の中、彼女を見つけて視線が交わった。ほんの一瞬だったと思う。けど、自分の口角が上がったのが解った。今自分はどんな顔をしているのかな？ 楽しくって仕方ない。通り過ぎる時に、あの彼女が息を飲んだのが何故だかはつきりと見えた。

あはっ

「あはははははっ！」

「楽しそうね、律子」

「ええ！ だって……見た？」

「見た。」

「当然よ。目標にしている人だもん」

「居た！ 坂本っ！」

「見えた！ 追いついたわ！ みんなっ、Bクラスが落とされる前にFクラスを落とすわ！ Fクラス代表までの道筋を決じ開けて！」

『『『おおーっ！！！』』』

近衛達も周りのみんなも抑えたわ！

「戦死者は、補習ーっ！！」

『嫌だあ！ 俺はまだ』

後一步おっ！

「西村先生！ 岩下律子と」

「菊入真由美が、総合科目でFクラス代表坂本雄二に勝負を挑みます！」

「近藤吉宗も菊入と岩下に挑みます！」

「助かる！」
「承認する！」

「『『『試獣^{サモ}召喚！』』』」

『 Bクラス 岩下律子
Bクラス 菊入真由美

総合 2 2 4 5 点
総合 2 0 3 1 点

V S

総合 1 1 4 3 点
総合 8 3 6 点

Fクラス 坂本雄二
Fクラス 近藤吉宗
』

現れたのは、ナツクルと棍。始動が早かったのは棍を持った近藤
つて方。操作も近藤の方が上手いだろうね。代表が戦うつてことは
そこまでピンチだつてことだから。つまり、近藤の方が厄介つてこ
と。

「真由美！ 棍の方から倒すわよ！」

「余所見してて大丈夫か？」

「つくう！ 真由美、そつちはお願ひ！」

「任せて！」

「さあ、行くわよ！」

「受けて立つ！」
ナツクルだけあって、身軽なフットワークで避けてラッシュをかけてくる。
数少ない透きに対して突きを繰り返しているけど、軽傷しか与えられていない。
急所以外のダメージは無視して、降す？ つと。お互い飛び退き様に武器を奮う。弾かれた勢いのまま近藤に向かう。

「「なっ!?!」」

真由美は、もちろん気づいていた。だから近藤が横凧にした棍を避けずに踏ん張って耐え、腕を絡めて脇腹に棍を挟み込んで固定していた。

棍を放せばいいものの、そこまで頭が回っていない。私達もやられたやつ。油断大敵。それを昨日学んだばかりだもんね。Fクラスだからって油断しない。

近藤の右腕を斬り落としてから喉元に剣を突き入れた。

『近藤吉宗、戦死!』

その言葉を聞き流しながら振り返り、地面に触れるか触れないかの位置に刃先を置きながら頭低く走り出す。

「ちっ! ヤバいか!?!」

坂本がフィールドギリギリまで下がって、頭などの急所を庇うようにナツクルの部分の部分を表面に、手首の辺りを軽く交差させて防御に専念する。

必殺の領域に入り込み、

「覚悟しなさい!」

烈迫の気合いを込めて剣を振り抜いた。

二の太刀の剣撃を考えない全力の一撃。

左手首を切断して右腕を弾く。私は攻撃できないけど、

「止めよっ!?!?!」

“助走”していた真由美が開けた急所、心臓に向けて槍を投げつけた。

「しまっ!……!」

驚愕に見開かれた坂本の両の目を認識した瞬間に笑顔が零れた。

やった!

「勝っ
」

【Bクラス代表 根本恭二 討死】

「……え?」「……」

坂本達も私達も揃って声を上げてた。点数等を確認して見ても……

『Bクラス 岩下律子

Bクラス 菊入真由美

総合 1420点

総合 949点

V S

総合 0点

総合 0点

Fクラス 坂本雄二

Fクラス 近藤吉宗

『おかしなところはなかったのに……
Fクラスの勝利です!』

.....はい？

「「そんなあああああつ！？」」

「鉄村 人先生！ 坂本です！」

「落ち着け。そんな名前の奴はこの学園にはおらん。それに俺もお前も坂本では無い。俺は西村だし、お前は岩下だろう」

「そうじゃないんですよ！ 私が言いたいのは！

「岩下が言いたいことは解る。」

坂本の戦死したのが僅かに遅かったんだ」

「なっ！ 思わず膝から崩れ落ちた。」

「ホント、危ないところだった。」

「.....なあ、岩下」

「何？」

「何でおまえは、前傾姿勢で加速してたんだ？」

「ああ、アレね。アレは、斬り上げに全て込める為。斬り上げが来るっていうのは解ったでしょう？」

「いや、横斬りの可能性も考慮に入れていたんだが..」

「なら、なおさらに成功だったってことね。」

「坂本。横斬りをしようと思ったら、一度上げてから斬らなきゃいけないし、急所は狙えないでしょ？」

「まあ、そうだな」

「それに、しつかりとした踏ん張りと身体を起こした時のバネも使ったの斬り上げができるし、真由美の視界の確保と序でに敵の視線の集中もできれば十二分って感じだったの。だから初めっから二撃必殺を狙ってたわけ」

それでも負けちゃったわけなんですけれどもねえ？

「なんか、ホント悔しい。あー、もうっ。」

「岩下、菊入。勉強になった」

「ん？」と、真由美と二人して首を傾げた。

「Fクラスが傾れ込んで、流れがこっちに傾いた時に“勝った！”
ってほくそ笑んでた。

なのに、さっきはギリギリだったろ？」

「そうね」

「それで俺は、“油断大敵”ってのを思い知ったんだよ」

「ははっ」「ふふっ」

「それは私達もだよ。ね？ 律子」

「うん、私達もその言葉を念頭に置いて戦ってたもん」

「ふっ…、そうか」とニヒルに笑う坂本を少し見惚れている真由
美にまた楽しくなった。

なんか、……………春だね……………。

うん。私にもなんか、ぼちぼち春ちょうだい？

第十九問 跪いてお誓めよ、聖なる足。掠れた喉で女王様とお呼びなさい。……

今回は早めの更新。

タイトルは、

『怪物王女』です。

理科達は戦後対談。のはずが、血の海ができて!?

「男つてのはバカな生き物よねえ」

第十九問 跪いてお誓めよ、聖なる足。掠れた喉で女王様とお呼びなさい。……

「はい、おしまい。あんまり無茶し過ぎないようにね」

明久の割れて出血していた拳を手当てして、傷口をつつ突いて注意を促す。

「解ってるよ。ありがとう理科」

「明久よ、随分と思いつた行動に出たのう。」

「なんとも……お主らしい作戦じゃったな」

「そうね。確かにそうだね。うん。」

「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「……秀吉、遠回しにバカだつて言っていない？」

「けど、それが明久のいいところ？ でしょう？」

「ちよつと待つて理科！ 何で途中で疑問を挟んだの！？」

「何でって……」

「明久だし」

「酷っ！？ 僕の硝子のハートは傷ついた！」

「対戦車ライフルも防ぐ防弾仕様でしょ？」

「強いわ！」

「相変わらず仲良いな」

「誰よ！ ペットなんか連れて来たの！ ……………翔子……？」

「やりかねんが、ちげえよ！」

翔子、マシにはなつただけだね。

「坂本、強かつたでしょ？ あの子達」

「ああ。ギリギリだったよ」

「「油断大敵”よ（だな）」」

坂本も何か学んだみたいね。

「ったく」とか言って頭をガシガシと乱暴に掻きながら、坂本が根本の前まで進んで行った。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といこうか。な、負け組代表？」

「ちつ…！ 阿部さえいなけりや負けてなかつたんだよ！」

「……え？ 何？ 解らず明久に向かって尋ねた。」

「明久、聞き間違いかしら？ 今、下衆ランクがまだ上がりようがあつたのかって驚かせられたんだけど？」

「そうだよ。理科のせいにしてたよ」

「…よく解つたな、おまえ」

「これでも、長い付き合いだからね」

「ま、いいが。」

とにかく、本来なら設備を明け渡してもらい、おまえらには素敵な卓袱台をプレゼントするところなんだが………」

勿体ぶって教室を見渡し、根本に視線を戻したところでクラス中が坂本の口が開くの待ち続ける。

相変わらず無駄なカリスマ性を持ち合わせているわね。

「特別に免除してやらんでもない」

坂本の発言に、ざわざわと周囲の、いえ、クラス中が騒ぎ始める。Fクラスはもちろん、Bクラスも。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ、確かにのう……」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

その言葉を聞いてFクラスは納得したような表情になったけれども、Bクラスは、「いいのか？」って顔がちらほら見られる。それら
そうよねえ。

「……条件はなんだ」

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

「言い方はアレだけれども、決して誰もフォローを入れる気配がない。ここまですれば、逆に清々しいわね。」

「そこでお前らBクラスに特別チャンスだ」

「ニヤリというよりは、ニヤーツとしたいやらしさの方がより際立った相好の崩し方だ。なんだか知らん顔したくなってきた。」

「Aクラスに行つて、試召戦争の準備ができてると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

「根本が疑うのもムリは無い。根本ならば余計に、かしら。」

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃さんでもないが？」

「そう言つて坂本が何処からともなく取り出したのは、先ほど木下が着て且つ、坂本のカバンから出てきた女子の制服。」

「ま、他人の趣味をとやかく言つつもりはないわ」

「「違つっ！！！」「」

「坂本も根本も大変ね。」

「あ、違つた。変態ね」

「「だからちげえっ！！！！！！！」「」

「必死なところが逆に、……ねえ？」

「何を考えているか解つたから否定しているんだぞ？ ……全く。話

が進まんだろうが」

坂本がジリジリと詰め寄っていく。

「で。どうするよ？ おい」

「ば、馬鹿なことを言うな！ この俺がそんな巫山戯たことを……！」

根本が慌てふためく。そりゃ嫌……なの？

「Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！」

みんなを鼓舞するように言う岩下と、

「任せて！ 必ずやらせるから！ ね、律子？」

楽しそうな雰囲気と嬉しいという気持ちを前面に押し出した菊入。

「それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！」

「そうだわ！」

「俺達も協力は惜しまない！」

「ええ、その通りよ！ 泣いても殴るのを止めないで……！」

「ちよつ！ 理科！？」

『『『解つた！！』『』』』

「解つたあ！？！？ みんな、落ち着いて！」

『『『大丈夫、泣いても殴るのを止めない！！』『』』』

「怖いよっ！」

因みに、みんなってというのはBクラスとFクラスの連合群。群れが半端なく大きい。数の暴力、だわ。こういう場合は……

「見ざる、聞かざる、言つてやる！ 覚悟なさいっ！」

「最悪だな！？」

最悪かな？ 坂本、根本には勝てないから。

「まあまあ、雄二。とにかく決定でいいよね？ 岩下さん」

「もちろん」

「貴様、勝手に人を売るな！ お、おい！ 聞いて　　くっ！
よ、寄るな！ 変態ぐふうっ！」

『とりあえず黙らせました』

「お、おう。ありがとう」

一瞬で自身のとこの代表を見限って腹部に拳を打ち込んだBクラ
ス男子。野中ってヤツだったかしら。変わり身の早さに坂本も目を
丸くしていた。

ていうか、岩下は気にせず明久と楽しそうに話してる。……ラ
イバル？ 翔子に報告つと。

prrrrr…。あら？ もう返ってきた。写メ？ ……仕方ない
わね。

「岩下！ はい、ちーず」

メールに添付、送一信ーつと。

「阿部さん、後で私にも写メもらっていい？ あ、アド交換しとこ
？」

「いいわよ。 はい。じゃ、メールも……送ったから」

翔子のをコピペ。早い早い。

「わっ、ホントだ。ありがとう阿部さん」

「理科でいいわ。こつちも律子って呼ばせてもらっつから。

あと……真由美も、ね」

隣に立って恨みがましく見ていた菊入こと真由美。

「ズルいよ？ 二人だけで盛り上がってるしい……」

「ごめんごめん。阿部…じゃなかった……理科。なんかこれからは、

真由美共々よろしくね？」

「理科ちゃん、よろしくっ」

「もしもし、あたしり力。真由美ちゃんよろしくね　　」

「まだあるのかな？」

「なんか、ありそうだよ真由美」

どうやら、二人にも伝わったみたいね。

「リカちゃん電話」「」

「何をやってるんだおまえら……。」

「おっと、逃がさねえぞ？ 根本恭子ちゃん？」

「や、やめっ」「」

「「えいつ」「」

「がふっ！」「」

軽やかな首筋への攻撃。思わず見惚れてたわ。

「さすがね律子、真由美。素晴らしいコンビネーションだったわ」

「そりゃもうスゴいのなんのつて。寸分の狂いもなく、同時に左右から挟み込んだ。ぐったり具合から見ても、威力も折り紙つき。」

「親指を立ててサムズアップ！ うん、二人共いい笑顔だわ。」

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

「了解っ」

ぐったりと倒れてる根本に近付き、制服を強引に脱がせる。うっ

！ こぼっ。という音と共に喉が焼けた。

「酸っぱっ。明久、気をつけて。視覚に入れちゃダメよ？ 精神汚

染が半端ないわ」

「解った。ありがとう、理科」

「これはこの上ない苦痛だな。俺らもそれも」

「だね。うーん……。これ、どうするんだろっ？」

「吉井くん、私がやってあげるよ」

「律子がそう提案した。」

「そう？ 悪いね、岩下さん。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて」

「それは無理。土台が腐ってるから」

「酷い言い様だね。それだけのことはしてきたんだろっけれど。」

「岩下さん。じゃ、あとはよろしく」

「なんかオツケー」

根本のことだからか、殊更に適当だ。というか、真由美はもうメイクに入ってる。

ん？ 明久は、もう戻ったのかしら。

「今日だけは、姫路に譲ったげる」

「何がだ？ 阿部」

「あら、須川。待ちきれなくなった？」

「ま、まあ…否定はしねえよ」

「…… コクコク」

いつの間にか、話の輪に加わっていた土屋も頷いた。

とりあえず、目下の礼として須川と土屋の前に手を差し出す。

「どうした？」

「……手？」

「苦しゆうない」と軽く演じながら解りやすく促した。これで解らなければ、諦めて。

「っ！ まさか…！」

「……須川、何か解ったのか？」

おっ、須川がいち早く察したようね。

「御手をお許しただけかという事か！？」

「…何っ！？」

土屋、もう鼻を押さえているの？ 早くない？

「あら？ 不満だったかしら、土屋」

だったら……。

と、下着の見えそうな絶対領域までスカート^すを摺り上げる。

「ももにどうぞ？」

「……！???!?!?!?! ブシャアアアツ!!!!」

「ムツツリーニーツ!？」

「はい、須川」

椅子に足を置いて太股を前に出した。

「さ、召し上げれ」

「ブシヤアアアツ!!!」
『ブシヤアアアツ!!!』

アレ？ 教室が血生臭いんだけど。

「ねえ、おつきした？ って幼児言葉ってローマ字に直して頭にBを置いたら、勃^{ぼっ}」

「この状態のムツツリー二に止めをさすのか!?!」

「ん？ 土屋に須川。倒れた体勢のままだと下着が見えるはずなんだけどねー、……………興奮した？」

ブシヤアアアツ!!!

再度、鮮血の華が咲いた。

「……………我が生涯に、一片の悔い無し」

「俺も、だ……………」

なんか、男子陣に止めをさした女の子がいるんだって。

阿部理科って言うらしいわよ？

第二問 嘘つきゆうくんと変わったしよーちゃん（前書き）

今回タイトルは

『嘘つきみーくんと壊れたまーちゃん』です。
珍しく真面目？ な部分もあり。

第二問 嘘つきゆう一さんと変わったしよーちゃん

なんかスゴい気持ちの悪い…… Innsmouth（インスマウス＝魚面）や Deep Ones（ディープワズ＝蛙面）こと深きものどものような生理的嫌悪感を抱く異常な存在だったわ。二日経った今でもこれ？ なんて威力よ。さすが、

「Bクラス代表は、伊達じゃないってワケね」

「違うと思うよ。ま、何を考えていたかは解らないけど、そういう表情の時の理科は半端ないよね」

そんなやりとりを目にした坂本は、「またか…」と頂垂れそうになった頭をなんとか持ち上げて教壇からFクラスに告げる。

「まずはみんなに礼を言いたい」

え？ どうしよう。終焉^{ラケナロク}ぐらい訪れるんじゃない？

「所謂、『神々の黄昏』ってヤツね」

「違いよ！ …おほん！ とにかく、周りの連中には不可能だと言われていたにも拘らずここまで来れたのは、他でもないみんなの協力があつてのことだ。感謝している」

カミカゼ隊含め、みんなに合図。いくわよ？

「「「ざわざわ……」「」「」

「わざとらしく擬音を口にしてんじゃねえよ!？」

「あら？ おかしいわね……」

「“あら？”じゃねー！ っていうか、おかしいのはオマエだよ！
？ オマエだから！ な？ 頼むよ?!」

からかい過ぎたかしら？ 苦労性なのね。

「大変ね、坂本も」

「そうだね」

「「疲れているのね（んだね）」」

「おかげさまでな！」

「ほんとにだよ、ムリしないで雄二。大変態なんだから」
「誰がだ!？」

大変と変態をくつつけるだけで大変な意味合いになったわね。

あ。それより、注意しないと。

「ちよつと、明久。広辞苑にも載ってること態々言わなくても……」
「載ってたまるかつ!?!?!」

「坂本雄二。鬘たてがみポケモン。ゴリラの進化系」

明久に親指を立てて見せた。ナイスよ。

「進化してたまるか!? 昔から人だ! しかも、凶鑑違いだつつの! つたく、おまえらは……」。

だが、その反応は解らんでもな……解らないんだが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

既に心労がたたって見えるけど、大丈夫かしら。……ま、坂本だしね。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスに勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師共に突きつけるんだ!」

『うおおーっ!』

『そうだーっ!』

『勉強だけじゃねえんだーっ!』

テンションの上がっていつてるのを横目に、冷めた目でそれらを見ていた。

「みんなありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えてる」

『どういうことだ？』

『誰と誰が一騎打ちをするんだ？』

『妹と義妹』

『妹だな』

『ばっか！ 義妹に決まってるんだろ』

「妹に優劣をつける時点で、あなた達は間違っているわ」

『『『おおーっ……。さっすが、阿部さん！』』』

「落ちて着けバカ！ 今から説明してやるから聞いておけバカ共」

坂本はバンバン、と教壇を叩いてみんなを静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

は？ 何を言いだすかと思えば……。一騎討ち。それだけを聞けば、正しいと思うわ。Aクラス平均と比較すれば、文字通り、桁違いの戦力差に敗北は必至。Aクラスレベルが三人じゃあ、勝率はほとんど揺るがない限りなくゼロに近いものになる。だからこそ、一騎討ちというのは正しい。条件が揃えば勝てるわけだし？

けどねえ……

「坂本じゃ勝てないでしょうが。“元”神童であって、現在は違う。それとも何？ 九割とは言わないわ。八割以上の勝率があっただけだ。言っているわけ？」

「まあ、阿部の言うとおり確かに翔子は強い。まともにもやりあえば勝ち目はないかもしれない」

“かもしれない”？ はっ。思わず鼻で笑っちゃったじゃない。

「違うわね。勝ち目なんて皆無でしょうに」

「つく……。だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだったろう？ まともにもやりあえば俺たちに勝ち目はなかった」

「まあそうね。決め手は、Aクラスの点数を持った人間だったわけだけだ」

明久は黙って聞いている。おそらくは、何が言いたいのか解っているのだろう。

言葉を切って、目線で坂本に先を促す。

「ああ、そうだな。つまり、今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺たちの勝ち揺るがない」

バカ共は、それを信じて士気が高まったようだが、姫路は、若干の不安を覚えたようね。それは正しいわ。疑う事も覚えなさいな、姫路。

坂本は、一つ大きく頷いて、

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童と言われた力を、今みんなに見せてやる」

『『『おおおーっ！』『』『』』』

教室は歓声に包まれた。あーあ。ダメね

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

どんどん不愉快になっていく。

「フィールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

ふっ……。ああ、そういうこと。

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

………人の思い出を、想いを、

「でも同点だったら、きつと延長戦よね？ そうなったら問題のレベルも上げられちゃうんじゃないの？ 神童って頭いい人だけ？ でも坂本、昔のことなのよね……それ。ウチは、厳しいと思うんだけど」

「確かに島田の言うとおりじゃ」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ いくらなんでも、そこまで

運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「では、お主は霧島の集中力を乱す方法を知っておるのか？」

「いいや。アイツなら集中なんてしなくても、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

踏み躪って、利用しようってのね……………。

「で？」

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった。俺がこのやり方を採った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

ある問題？ ……ふうん…、そう。

「その問題は 『大化の改新』」

「ガリツ ……雄二っ」

辺りに響くほどの齒軋りが聞こえた。明久も相当怒ってるわね。

「どうした、明久」

「見損なつたぞ、雄二」

「は？ おまえ何言つて……………」

「625（むじこ）の改新。でしょ？」

はあ……………翔子ちゃんを利用するっていうのか……………？」

「なっ！？ おまえ、何でそれを！ それに……………」

坂本も息を呑む。今ので大方予想はついているんでしょうけれどね。明久も幼なじみなんだって。

「いいから、さっきの質問に答えろよ雄二！っ……………」

「っ！ ……おまえには関係ない」

明久の怒声に、坂本の瞳の色が変化していく様を見てとれた。

「てめえっ！？」

「明久」

胸ぐらを掴みにかかる明久を、静かに諫めた。

「はっっ…ふう……………。ごめん、理科お願い」

意識して深呼吸しなければ落ち着けないほど、怒ってたみたい。こっちはまだ、腸煮え繰り返ってるけど。

「坂本、アンタじゃ勝てないわ」

「いいや、そんなことはない。翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

よかった。本っ当によかった。翔子が明久を好きになってくれて

「ムリよ、有り得ない」

「くっ、士気を落とすような真似はするな。阿部、おまえは何がしたい。どっちの味方なんだよ」

「ふっ…ふふっ、あははっ！ どっちですって？ いつだって翔子の味方よ！」

当たり前でしように。

あの後もずーっと、そうだった。そして今までもこれからも、ずっとずっともつと先まで。

「アンタじゃ絶対に勝てない。断言してもいい」

「何を根拠に」

解らないでしょうね…。ええ、あなたには。

「アンタと違って、翔子はいつまでも思い出に縋りついたりしない」

坂本が息を呑んで、二の句を告げないでいた。

「ちゃんと思い出を大切にはしているわよ？ けれどね、大切にすることをと縋る事は違うの。違うのよ」

「解って！」

「解っていないからそうやってできるんでしょう？」

作戦？ Fクラスの環境を変えたい？ Aクラスに勝ちたい？

勉強すればいいってもんじゃないって知らしめたい？

はっ。笑わせてくれるわね？ 本当は、自分の都合を押し付けようとしていくくせに」

坂本自身、解らなくなってきたのかもね。

「ねえ、何をやる気だったの？ 何がしたかったの？ ……翔子に何を求めてたの？」

「っ！？ そ…それは……」

何も言えず、ただただ坂本は俯いていた。

「過去ばかり顧みて、今を全く見てない。速度の違いはあれど、いつまでも変わらないなんて有り得ないのよ。アンタが足踏みしている間に翔子は走って…いえ、翔んで行ってるわよ？ 現在進行形で」

「……そう、か。……そうか……」

翔子は……変わった、のか……？」

「不変のものは無いのよ。広大な宇宙でさえ今この時も、変わり続けていっているのだから。」

それに、坂本も変わったし、これからも変わる。…でしょう？」

「ああ、そうだな……」

「で、どうするの？ アンタが求めていた答えは、おそらく無いわよ……」

坂本は少し思案するように、目を閉じた。

まだ考えが纏まっていけないのか、苦笑いを浮かべながら話始めた。

「うん、まあ、阿部の言うとおりだったと思う。なんて言うかだな…、とりあえず謝ろうと思う」

言っている途中から坂本の表情が変わっていった。

「ああ、うん、そうだな…。言ってる納得できた。俺は、過去の清算をしたかったのかも……」

「相変わらず素直じゃないんだね、雄二は」

「うるせえよ、明久」

なんだかんだで仲良いのよねえ、この二人。

「だったら協力してあげるわ。ね、みんな？」

呼び掛けに皆が応じてくれる。

「ま、仕方なからうて。友じゃからの」

木下がウインクをかます。っていうか、男に向かってしてるけど、全く違和感無い。

「ウチもいいわよ？ それより、吉井。霧島とのこと詳しく聞かせてもらおうよ？」

「アンタにも勝ち目は無いわよ？」

「うるさいっ！ ばーか！ 阿部のばーかっ！」

島田のそういう可愛いところをもっと表面に出していけば好かれるのにねー。

はあ……。

横を見ると、明久もため息をついてた。思ったことは、同じみた

い。
「私も何ができるか解りませんが、頑張ります！」

姫路らしいっちららしいわよね。力み過ぎてコケないでよ？

「……水臭い。保健体育なら任せろ」

たぶん、学校一でしょうね。保健体育は。エロースの生まれ変わりかインキュバスやサツキュバスが前世なんじゃないかしら。

『ここまで来たんだ、やってやろうぜ！』

『今さらだろうが。代表』

『やあーってやるぜえ！』

Fクラスの面々も協力してくれるようだ。

「おまえら……」

「泣いちゃうのかしら？」

「泣くか！ けど、ありがとな」

照れくさそうに頬を掻いてから、再燃した目で宣言した。

「んじゃ、改めて。」

俺達は、Aクラスに挑んで勝利をもぎ取る！ そうすれば俺達の

机は

『『『システムデスクだ！』』』

第二一問 お茶にじす……の？（前書き）

今回は、

『お茶にじす』。

どうぞ。

ただの宣戦布告だけなんだけど……。

第二一問 お茶にごす……の？

「一騎討ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。

今回は代表の坂本を筆頭に、姫路、木下に土屋と主力メンバー勢揃いでAクラスに来ていた。

「うーん、何が狙いなのか？」

現在坂本と交渉のテーブルについているのは木下の双子の姉の木下優子。ホント……

「いつ見ても、姉弟そっくりよね」

「「当たり前でしょ（じゃ）！？」」

「時々知らない人になったり……」

「しないわよ！！」「せんのじゃ！！」

「あら、そう？ 残念」

言いながら目の前のお菓子を適当に選び取る。

「はあ……。すまないな、木下。で、だ。さっきの答えだが、俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

ため息をつかないで欲しいわね。って思っていたら、木下姉が苦笑しながら気にしないで。と手を振っていた。

「そりゃ、面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからと言ってリスクを冒す必要も無いかな」

「賢明だな」

あら、このお茶菓子おいしいつ。どこの物かしらね。 岩鍵

？ どこよ、それ。輸入物なんだ。の割には食べやすいじゃない。
ふむふむ、協賛は……川菱って……、偽物クサイ名前ねえ。

「あ、翔子。お茶おかわり」

「……ん。理科それ、ちよつともらう」

「はいはい」

翔子と目が合った。もうそれこそ、キュピイーン！ という擬音がつきそうなくらいには目が爛々としていた。二人して。

「「明久、あ〜ん」」

「ちよつと待つんだ二人共！ Fクラスどころか、Aクラスさえも敵に回してしまっているんだ！ お願いだから気づいて!？」

「……あー…、ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

濁したわね。お茶飲んでいるだけに？

坂本が腕を組み、顎に手を当てながら訊く。

「時間は取られたけど、それだけだったよ？ 何の問題もなし。代表がいつになくスゴかったから余計にね」

翔子が照れくさそうに身を縮こまらせた。かわいっ。

あ、木下姉、口角が痙攣気味よ！ 気づいて！

「心の中でシンパシーを送って気づいてもらわないと」

「理科、せめてテレパシーにしようか。」

あとね、アレはきつと僕達のせいだから」

心外だわ。ただのふわふわティータイムなのに。

あれえ？ って感じで顎に指を当てて首を傾げていると、

「いやいや。教室奪いに来たぜ！ って言ってるすぐ傍で、お茶してるんだよ？」

「じゃあ明久は、翔子からの誘いを断るってのね？」

「バカな!？ セメントでできたパンを食べさせられるくらいに有り得ないよ!！」

確かに有り得ないわ。みんなそう思うでしょうよ。

木下の挑発に乗り、昨日Aクラスに攻め込んだCクラス。まあ代表があんなのでクラスの統一が取れてない奴らが勝てるわけないんだけど。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……、昨日来ていた……あの……」

「ああ。アレが代表をやってるクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよな？」

試召戦争のきまりの一つ、準備期間。

試召戦争の泥沼化を防ぐための取り決めとして、敗戦したクラスは三ヶ月の準備期間を経ない限り、自ら戦争を申し込むことはできない。

「知っているだろ？ 実情はどうあれ、対外的にあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっていることを。規約にはなんの問題もない。

…… Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

「……それって脅迫？」

そんなもの脅迫の内に入らないって。力関係がかなり傾いているから相手の優位は揺るがない。嘘も方便ってね。

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

事実、その通り。

お茶を啜りながら、ちらつと横を見る。

「うーん……わかったよ。何を企んでるのか知らないけど、Fクラスに負けるなんて思わないからね。その提案受けるよ」

「ほ、本当に？」

「島田あ、何驚いているのよ？ このクラスから持ちかけた話ですよ」

木下姉は「いや、でも……」なんて言ってる島田に、何か思い出したのか身震いして言った。

「…だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だも
ん……」

確かにお断りだね。アレはPTSDになってもおかしくは……、
精神崩壊起こさなかっただけマシ？

「でも、こっちからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そう
だね、お互いに人選をして、一騎討ち五回で三回勝った方の勝ち、
っていうのなら受けてもいいよ」

「なるほど。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒しているんだ
な？」

「うん。たぶん大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが
絶対調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし」

姫路に限っては無いわね。何だかんだで優良児。才女の敵では無
い。

「安心してくれ。こちらからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みにはできないよ」

これは競争じゃなくて戦争だからね、と付け足す。当然ね。それ
を理解してない輩が多過ぎる。土台無理な話かもしれないが……。

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

あっさり呑んだけど、おそらくは今もテストを受けているあの二
人も使うんでしょね。

「ホント？ 嬉しいな」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハ
ンデはあってもいいはずだ」

教室奪うぜ。って言って尚且つ、教科の選択権を全部よこせって
のは随分と図太い神経の持ち主。ほんっと、ズル賢いやツ。

「え？ うーん……」

眉間にシワを寄せてるけど、あそこ押しちゃあダメかな？

「……受けてもいい」

カリカリカリカリ……。とぼっきーを小動物のような動作で食べる
翔子。

「……………ごくん。雄二の提案を受けてもいい」
「あはは……………でも代表。いいの?」
「……………その代わり、条件がある」
「条件?」
「……………うん」
「一応初戦が始まる前にカヲルさんと話をつけておいたけど、
……………負けた方は何でも一つ言うことを聞く」
「それとは別についてこと…?」
「……………カチャカチャ」
「土屋何してるの?」
「……………撮影準備」
「何を撮影するつもりなのよ。もうちょっと考えなさいな。」
「じゃ、こうしよう? 勝負内容は五つの内の三つをそっちに決め
させてあげる。二つはうちで決めさせて?」
「ま、妥当な線ね。」
「交渉成立だな」
「……………勝負はいつ?」
「そつだな。十時からでいいか?」
「……………わかった。明久も理科も頑張つて」
「お互いに、よ」
「翔子ちゃんもね」
「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」
「そつだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね」
「さ、忙しくなるわよ?」

第三二問 美闘士達の決戦！ 『クイーンズブレイド』（前書き）

今回タイトルはそのまま、

『クイーンズブレイド』

男はまあ、今回戦わねえしねエ………と思ったり。

とりあえず、理科は自活しています。研究者という肩書きではなく多額の給金が発生する仕事。

で、

他よりかは、少し大人な感じ？ なのかな、と思います。

あ。つまりは、女は（クイーンズ）強い（ブレイド）。

一騎討ちっていうのもありますけどね。

第三二問 美闘士達の決戦！ 『クイーンズブレイド』

今日はここ数日の戦争で何度もお世話になっている、Aクラス担任かつ学年主任の高橋先生が立会人を務める。知的な眼鏡とタイトスカートの組み合わせって……いやらしいわよね？ 気のせい？
ん……

「明久」

「何？」

「ムラムラする」

「何言ってるのさ!？」

「では、両名共準備は良いですか？」

「クールね、高橋先生。」

「ああ」

「……問題ない」

会場はAクラス。こっちの方が広いし、腐った畳のFクラスじゃ締まらないしね。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

向こうは木下の姉、木下優子。

対するこちらは、

「ワシがやるっ」

その弟、木下秀吉。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？ 姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

Cクラスの小山って、確かこの前木下が……

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

木下が姉のフリをして罵倒しまくった相手だったわね……。

あー、この分じゃあ大分お怒りね。

手を合わせて目を瞑る。

木下……………

『姉上、勝負は どうしてワシの腕を掴む？』

『アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？ どうしてアタシが

Cクラスの人達を豚呼ばわりしてる事になってるのかなあ？』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して

あ、姉上っ！ ちがっ……………！ その関節はそっちは曲がらな

っ……………！』

ガラガラガラ

扉を開けて木下姉が戻ってくる。

「潔く散った戦士バカに、黙祷」

「やめいつ！ ぱあん！」

「いたいわ、明久」

にしても、さすが明久。キレが半端ない。…それより、ハリセンも使うようになったのね。

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりの人を出してくれ
る？」

「じゃ、お相手願おうかしら？」

一歩前に出て、すぐに答えた。

「あなたが？」

「ええ、お手柔らかに」

「おい、何を勝手に！」

「静かになさい。肩書きだけの代表さん」

「くっ……………！」

坂本は苦虫を噛み潰したような顔になった。

「アンタは勝つことだけを考えてなさい」

「いや、だからこそアイツらを味方に入れたんだろうに」
仕方がないのできつちりと教える。

左手で右肘を持つて、右手で頬杖をついて言った。

「いえ、個々ではなく、タッグの方が強いわ。そのことはあなたが一番理解できるでしょう？」

「…まあ、な」

「でも、安心してくれていいわよ？ アンタ達に阿部理科との格の違いを教えてあげるから」

そのセリフにいち早く、木下姉が食らい付く。

「はい？ こっちにも言ったのかなあ？」

ものスゴくいい笑顔ね。青筋の浮かんだ個性的なものだけでも。

「もちろんよ。あら、解り辛かった？ 理解力に乏しいのね」

「言ってくれるわね。たかが、Fクラスのクセに何を言っているの？ 格の違いってそっち側が感じることでしょ？」

「木下さん、結果で示せばいい事です。お二方、そろそろ初めてください。」

教科は、如何しますか？」

高橋先生から叱咤される。

「教科の選択は、あげるわ」

勝利は譲らないけれど。

「は？ あのね、どこまで巫山戯るつもりよ」

「そんなつもりは無いわ。回数が限られているんだもの、必要がないからあげただけ。それでも気に入らないっていうなら、こっちの得意科目である化学をあなたが選択すればいいわ」

「解った、受けて立ってあげるっ」

単純。もつと思考なさいな、……だから、相手の手の平の上で踊ることになる。

「選択科目は、化学。……承認します。それでは、始めてください」

「「試獣召喚！」」

「すぐ楽にしてあげる」

両手を広げて、

「刮目なさい」

パン！ と柏手かしわでを打った。

「はい、おしまい」

種も仕掛けもありませんと両腕を軽く開いて見せ、そして優雅に見えるようしてみせた。

「え？ どういう……」

理解が追いつかないんでしょうね。

ただ。目の前では、既に消えていく自身の召喚獣を木下姉は呆然と見ていた。

『Fクラス 阿部理科

化学 772点

VS

化学 0点

Aクラス 木下優子』

急な音の方に意識をやったその瞬間に、倍はある点数にて素早く撃破した。そう……、ただそれだけ。

「それにしても理科、今日は調子悪かった？」

「……は？」

「残った時間寝てたからね」

「しょ、勝者、Fクラス阿部理科」

おかしなこと言ったかしら？ 高橋先生も、あんな一瞬で、しかも透きについて終わらせるとは思ってたみたいね。

あー、そうそう。

「坂本も、Aクラスの間人も、高橋先生も……、人を見下す前に己を磨いてみてわ？ 蛙よ、大海を知れつてとこかしら？」

曲がりなりにもAクラスなんだから、理解……できるわよね？」

今回、腕輪を使わなかったにしても、律子と真由美の方がよっぽど大変だったわ。

腕輪うでわのことはカヲルさんにもう言ってる。その代わりに、次の土日は学園に泊まり込みになったんだけどね。

「『理科』という名前は、伊達じゃあないの。名に恥じない生き方をしているつもりよ？ “つもり”で終わるなんてバカな真似はしないけど」

木下姉に背を向けて自クラスに戻った。

「では、次の方どうぞ」

「…………… スック」

土屋が立ち上がった。

科目選択権がここで初めて生きてくる。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは髪をショートカットにした、ボーイッシュな女子が出てきた。

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

ぱっと見少年のようだ。かなり爽やかな印象も影響しているだろう。

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

高橋先生の問いに即答した土屋。唯一無二の武器選択。

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤が土屋に話かける。随分と余裕そうだけど、これの保健体育にかける情熱…、いえ、性欲の実力を知らないの？

「……………事実無根 ブンブン！」

途中から口に出してしまったわね。

「学年どころか学園一のどスケベの土屋に」

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？ ……キミとは違って、

実技で、ね」

「刺客がっ！」

「理科……………しっ」

明久が人差し指を唇に当ててきた後、「ね？」と首を傾げていた。

あら、いいわね
って。

あのね、翔子……………土屋ばりにシャッターをきるの、やめて
みよっか。

「……………くっ！ 全くもって興味ない ドバドバ」

鼻血を止めてからいいなさいよ。カメラのフラッシュの中、目元を隠してみると、いつの間にか土屋も参戦していた。

「眩しいから！」

ホント、目がチカチカする。

「……………ごめん、理科」

「……………すまな」

「Bクラス戦での約束は反古させていただくわ」

土屋は、見惚れるような土下座を繰り返した。

「申し訳ございませんでした。然るべき処置の後、何卒、もう一度
ご考慮のほど、よろしくお願い致します」

「行動と結果で示しなさい」

「……仰せのままに」

恭しく腰から折るお辞儀をする土屋。

「あはは 面白いねー、Fクラスの人って。」

あ、そっちのキミ、吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが手取り足取り教えてあげようか？ もちろん実技で」

「よろしく！ と言いたいところ」

“ なんだかどね ” とでも続くのかしら？

「吉井には永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！ 永遠に必要ありません！」

「そんなことは無いわね」

「「え！？」」

驚き過ぎじゃない？ アンタ達。

「少なくとも、二人はいるわよ？ 明久にじっくりたっぷりねつとりと、実技を教える人間が。実戦経験は無いけれどね」

教室の半数 - 1 が反応してくれる。

「ちよっ！？ 落ち着いて、理科」

「……そう、私は四十八手を覚えた」

今度は、- 1 は相変わらず無反応で、代わりに女子にも反応が…… 大丈夫？ かしら。Aクラスは魔の巣窟だったわけね。

「何だっつて！？ どうやってそんなものを！」

明久の疑問は、あっさり解消される。

「……ぐーぐるって便利」

「ネット社会のバカっ！」

「「明久、大丈夫？」」

「二人がね!？」

「日本語、大丈夫?」

「……心配。明久、病院行こ」

「僕は二人の仕打ちに傷ついたっ!」

明久弄りは、此処までにして。

「そろそろ召喚を開始してください」

ちょうどいい頃合いに、高橋先生から声上がる。

「はい。試獣召喚っ」と

「……試獣召喚」

現れたのは、女子高生に巨大な斧を持たせたような姿の工藤の召喚獣。それにタイトルをつけるとしたら『セーラー服と大戦斧』かしら。土屋のは、もう見馴れた忍び装束に小太刀の二刀流。こっちのタイトルは、『天誅く互いにく』ってどこ? 首をブンブン振ってる土屋は、置いておきました

ちゃん、ちゃん

第三問 ヨロヨロの実？ vs 鮮血のムツリーニ（前書き）

今回は、解りやすいかな？

『ワンピース』と

『Tales of The Abyss』。

エネルとアッシュ。

康太の鮮血つぷりがばない（笑）

第二三問 ゴロゴロの実？ vs 鮮血のムツリーニ

工藤が艶っぽく笑いかけると同時に、腕輪を光らせながら召喚獣が動いた。

巨大な斧に雷光を纏わせ、予想外のスピードで土屋の召喚獣に詰め寄る。

「早速だけど……、それじゃ、バイバイ。ムツリーニくん」

そして、豪腕で斧を振るう。

おそらく、誰もが土屋の召喚獣を斧が両断する

「……………加速」

と思つた直後、土屋の腕輪が輝き、彼の姿がブレた。

が、

「くっ……！」

「甘いよ？ ムツリーニくん」

工藤は、いつの間にかその紫電をドーム状にして、自身の周囲へと張り巡らせていた。工藤も一気に数ヶ所の傷口を作つて、たたら踏むを踏む。

速さでいえば先ほどの比では追い付かないほどの攻防に教室が静寂に包まれた。

「……………まさか、仕留め損なうとは……」

「おもしろそうだったから覗いてたんだよねえ、…Dクラス戦」

「っ！……………迂闊だった。俺とした事が、配慮に欠いた」

「油断大敵。なんだよね？ 阿部さん」

一部のAクラスにも浸透してたというよりは、Bクラス戦も見たのね。

『油断大敵』。ま、当たり前だけど、当たり前を理解できないのね。みんなも。

『Aクラス 工藤愛子』

保健体育 446点

VS

保健体育 572点

Fクラス 土屋康太 』

ダメージを受けてあの点数。

「よっほどのすけべね」

「……そんな事実は存在しない ブンブン」

話をしながらも工藤の背後から斬ろうとするが、またも、紫電を纏って土屋の攻撃を阻む。

「……厄介な」

「あれから、ムツツリーニくん対策の為に練習したからね」

可愛くウインクをしている工藤に透きは見当たらず、土屋は責め開ぐねていた。

「もう降参？」

「……無礼^{なめ}るな！」

土屋は懐から手裏剣群を放っていた。取り出す動作が全く見えな

い。
棒手裏剣は真っ直ぐに、四つ刃の手裏剣は弧を描いて工藤に殺到した。棒手裏剣と手裏剣のタイミングをずらして放ってから二射目は全て同時に射る。やるわねえ。

「くっ！……このおっ！」

身の周りにドームを張り続けるのは工藤もさすがに厳しいのか、斧と体捌きによって凌いでいた。

その間にも、どんどん点数は減っていく。

「……おい」

土屋は、決めにかかるみたい。ぼそつ、と“加速”って呟いていた。

「背中ががら空きだ」

工藤がニヤアツと口角を吊り上げた。不味い！

「土屋！ 退がりなさいっ！！」

「違うよ。空けておいたんだよ」

「なっ！？」

「ボクのテリトリーにようこそ。ムツツリーニくん」

「…ちいっ！」

土屋が退がるうとするけど、工藤は小振りな攻撃で透きを作らない。

「そら！ そら！ そらっ！」

斧で突き、横に躲せば払い、薙。後ろに飛び退こうとも、強く踏ん張り、前方に飛び上がりながらの斬り上げ。工藤が空中に浮いたところを反転してオーバーヘッドキックのような蹴りを頭部に繰り出し、蹴りの勢いそのまま独楽の如く回転して斬撃を見舞う。

あ。

「あはっ ボデイが」

土屋の腕が弾かれた！

「土屋！ 腕輪っ！！」

「解っている！」

いつもの喋り方と違う為、土屋の焦りがよく見えた。言われる前に既にワードを唱えていたのだろう。叫んでいる途中で腕輪が光り土屋の姿がブレる。

だが、工藤の腕輪と斧も光り輝いていた。

「がら空きだよ！」

高速移動した先で土屋の上半身が刎ね飛んだ。

「「え！？?!」」

みんながおんなじ反応を示す。

電光石火。

高速の土屋を上回る光速で捕えたってわけね。

「……………今回は敗けた。だが、次は勝つ…！」

「望むところだよ、ムツツリー二くん。点数はこっちが負けてたし」

二人が握手を交わし合う。土屋、女の子の肌よ？

「……………そんな名前じゃない。土屋康太だ」

3、

「あ、うん。康太くんね。じゃ、ボクも愛子で」

2、

「……………」

1、

「康太くん？」

……………0。

「……………っ！ ブシャアアアッ！」

「康太くん?!」

「21秒よ！ 記録更新だわ」

「よかったね、ムツツリー二」

「……………ぐっ！」

力強く親指を立てているけど、気がついて！ そこは、 工

藤の太ももよ。

あ、また。

それは放物線を描いたが、器用に工藤は汚れないようにしてる。

「勝者、Aクラス工藤愛子！」

そんなやりとりをやっている間にも、高橋先生は事務的に熟していく。

「土屋、元気出さない。反古にはしないから」

「がばあっ！ といきなり起き上がるかと思われたが、土屋の顔を

覗き込んでいた工藤の胸にぶつかってバウンド太ももに着地。

「かつ！……………、ブシャアアツ！」

目を見開いてから鼻血を噴射。顔を逸らした為に工藤は無傷。無駄に紳士な土屋には感服しそうになるけど、…鼻血……………。

「何、この残念な感じ」

「それ、理科が言っちゃダメだよ」

いつもと立場が違うとか言ったの誰？ いつだって本気よ！

「上方四方固めするわよ？」

「ちよっと待ってみんな！ Fクラスに混じって拳手しないで?!」
他クラスにも反応ものずきあり。

みんな寝技が好き。っと。

寝技を受けたい方は、連絡おいたっ。明久は、ツツコミが上手い。っと。

第二四問 目からビィィーームッ！……（前書き）

これは言わずもがな、

『デ・ジ・キャラット』の、本名シヨコリコとデ・ジ・キャラット
です。

おそらく、ゲーミングに行ったらいますw

第二四問 目からビィーームッ!!!

「では、三人目の方どうぞ」

「あ、は、はいっ。私です」

姫路…か。まあ、妥当ね。Fクラスには他にいないっていつものあるんだけど。

「それなら、僕が相手をしよう」

「やはり来たか、学年次席。」

「ここが一番の心配どころだな」

学年次席、ねえ……。坂本からしたら凄いかしら？

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

高橋先生の声に、久保とかいうのが即答した。

「ちよつと待った！ 何を勝手に！」

「坂本君、私は構いません」

「ああ、もっつ！ どいつもこいつも！ …… ったく。解った、姫路に任せる」

「はいっ！」

「それでは……」

高橋先生がフィールドを展開する。

久保と姫路、それぞれの召喚獣が喚び出された。

□ Aクラス 久保利光

総合科目 3997点

VS

Fクラス 姫路瑞樹

『マ、マジか!?!』

『いつの間にこんな実力を!?!』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!』

無いわね。翔子に及んでない。

「姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……?」

「少しだけ悔しそうに久保が姫路に尋ねた。ま、がんばった方ではあるんだけどね。」

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

褒め過ぎ。増長しちゃうから、こいつらは。

「Fクラスが好き?」

「はい。だから、がんばれるんです」

いい子なんだけど、真っ白過ぎて染まっていけないといいわね。

朱に交わればっていうし。

「そうか。素敵なことだと思うよ。その点数も凄いしね」

久保は何か思いに耽っていたのか、暫く瞼を下ろしてから開いた。

「だからと言って負けるつもりは、更々ない。僕にだってプライドがあるんだ。悪いけど、姫路さん……ここは勝たせてもらおう!」

久保の繰り出した大鎌を弾き返して、姫路も己の気持ちを吐き出す。

「負けません!」

即座に腕輪を使って熱閃を浴びせる。弾かれた透きと開始早々の

虚をついた見事な連撃。

「ぐっ…!? しまった!」

お互いに召喚獣操作に馴れていないからこそ、決着は着かず。姫路も的の大きく急所も狙える胸辺りを射ち、久保は余計な動作はできないと、ただ体を丸めた。頭などの急所は守り、手足で受ける。

咄嗟の判断にしては、二人共に上出来ね。

明久も楽しそうに見てる。坂本の方には余裕が見てとれない。あの点差ならば、即決できるともほくそ笑んでいたの? 世の中そんなに甘くないわよ?

先に姫路が動いた。

姫路が駆け、相手目がけて突きを繰り 違う! そう思った時には剣先が輝き、再度の閃光が進った。姫路はそのまま爆煙の中に突っ込み、大きく薙払って視界を正常に戻す。

「続けての使用は無いと思いましたか?」

「否定しないさ」

「そうですね。その程度の思いならば……私こそ勝たせてもらいます!」

「まだだ! まだ終わっちゃいないっ!」

久保が鎌で突く。久保のは、斧槍というよりは、鎌槍……バルデイッシュの類いだらう。大鎌に槍の穂先が付いている。

「させません!」

大剣で得物を掲ち上げた。ダメよ! 相手の得物は、槍じゃなく鎌なのに!

「捕えた!」

久保は踏ん張り、全力で鎌を振り下ろす。柄を大剣で受けるものの、曲がった刃先が肩に突き刺さる。姫路が驚愕に僅かばかり意識をやった刹那で、久保は姫路を蹴り飛ばして、自分の足元の方へと鎌を強く引いた。

「あっ!」

姫路が声を上げるも、時既に遅し。右肩を深く抉られて、大剣を

振るうには不利な状況に陥った。

けれども、姫路の目は死んでいない。…ひゅく　カッコいいわね。思わず口笛を吹いちゃった。

右手は添えるだけ、左手を軸に大剣を持ち替えて構え直す。

「すうっ……、ふう……」

息を整えてまっすぐ相手を見据え、じりじりと姫路が擦り寄る。

それに対して久保は、一足飛びに距離を縮めた。

「はあっ！」

馴れないながらも、でき得る限りの小さい動作で久保の攻撃を捌き続けて身を守る。

久保の突きを大剣の腹で弾き、すぐ戻った鎌の払いを懐に潜り込んで避けた。姫路も攻撃できる間合いじゃない。

「甘いよ！　姫路さん」

久保が飛び退き、鎌を引いて姫路の背中を狙う。姫路の大剣が間合いに入るより早く、刃が背に食い込むだろう。

「百も承知です！」

そう返した姫路は、高く跳び上がった。姫路のセリフからして、前持って跳ぶ準備をしていたってわけね。

攻撃を予測していたっていうよりは、動きを誘導させた。……か。益々持ってスゴいじゃない。

先ほどまでは小振りの動作で凌いでいた姫路が、ここに来て漸く大剣を構え、上段から振り下ろした。

全体重がかかるようになんだろう。大剣の刃を下に、逆立ちする勢いで久保に斬りかかっていた。

「ハアアアアツッ！！」

着地したばかりで体勢の整っていない久保の腕を浅く斬った。久保は武器を取り落としそうになるが、強く握りしめて防ぐ。

「つく、危なかった」

久保が思わず安堵の息をついた。

「そこです！」

強く叩きつけて跳ねた大剣の刃を、姫路は自信のダメージを顧みず思いつき蹴り上げ、斬撃を生み出した。

「しまっ!?!」

「これでお相子です!」

久保の左腕が宙を舞った。姫路は、それを見届けることもせず大剣を横風ぐ。

久保も無理矢理頭を切り替えて、バックステップで距離を保つ。

誰もが姫路の攻撃が避けられた。と思った時、「待ってました」と言わんばかりの獰猛な笑みが姫路に張り付いていた。

正直……………ましい……………。

「焼き尽くして!」

凧いだ大剣に沿って、剣先から“熱閃も”凧いだ。

「「「!?!?!」」」

声無き声で教室が揺れた。そんな使い方とは思ってなかったんでしようよ。

だけど何より、姫路の“あの”顔を見たのが大きだろう。エンドルフィンが過剰分泌中かしら?

久保も姫路も結構ギリギリ。次の一手で決まりそうね。

「ここまでとはね。さすが姫路さんだ」

「ありがとうございます、久保君」

「いやいや。だけど、君も辛そうだ。姫路さん、もうお終いにしよう」

「もちろんです」

姫路が一步踏み出したところで前に倒れた。

「え?! どうして?!?!」

あつ、久保の腕輪か!

「姫路さん、どうしても勝つ必要があるんだ。あと二戦…、何があるか解らないからね」

久保が眼鏡を中指で押し上げてから続ける。

「……だから、待った。この腕輪に馴れられないうちに倒せるよう、ね」

姫路が立とうとするものの、見えない何かに押さえつけられているみたいだ。しかも先ほどより、さらに身動きがとれていなかった。

「悪いけれど」

「動いて！ 動いてえっ！！」

姫路は何とか動かそうと試みるが、微かに蠢くだけで、まさしく虫の息。

「ここは譲れない」

健闘虚しく、あっさりと首が刎ねられた。

『Aクラス 久保利光』

総合科目 32点

VS

総合科目 0点

Fクラス 姫路瑞樹』

「勝者、Aクラス久保利光！」

高橋先生の宣言が響き渡る中で、姫路は「ごめんなさい」と泣いていた。

そこまで責任感じなくていいのに。いつもの姫路にホッと息を吐き、思いを馳せた。

さつき姫路を見た時、“正直………^{おぞ}怖ましい……。”って思った。

はあ……。普段温和しい姫路でさえ、あそこまで好戦的になるなんてね。

モヤモヤする。

思い過ごしであればいいんだけど……………。

第二五問 HiME達の峻烈な舞(前書き)

今回タイトルは、

『舞・HiME』カグツチは強過ぎやと思う。

第二五問 HiME達の峻烈な舞

「久保君、あの腕輪ってやっぱり……」

「君達も気づいていたかと思うけど、重力を変化させる腕輪さ。吉井君」

姫路の重心移動に合わせて発動させたわけね。刹那を見極めでの発動、久保もやるわね。

「では、次の方どうぞ」

次は、彼女達の出番ね。

「はい！」

高橋先生の声を聞いて二人で前に出たところ、理科と目が合った。気がつけば、笑みを浮かべてた。隣に立っている真由美も笑っている。

「あの、どちらが……？」

「高橋先生、二人共です。タッグ戦はしてはいけないというルールはありませんから」

「そうですか。Aクラスも二人になりますけど？」

「当然です」

高橋先生は、首を傾げてた。一対一だろうが二対二だろうが変わらないのにつて、なんか思ってるんだらうな！。

「ちよつと待ちなさいよ。その二人Fクラスじゃないでしょう？」

「だから？」

「っ！ 何で参加して……！」

「他クラスの人間が参加しちゃいけないっていうのも、ルールになかったはずだが？」

「つく、……勝手にすればいいわ」

坂本って、本当に意地悪だな。真由美、気をつけて。
ん？ 話が終わったみたいだね。

「Fクラスからは、私、岩下律子と、」

「菊入真由美が相手しますっ」

「Aクラスは、わたくし佐藤美穂さとうみほがお相手します。以後お見知り置きを」

前に出てきたのは頭良さそうな眼鏡の、いかにも優等生って感じの子。

「もう一人の方は……」

高橋先生がAクラスを見回すと、さっきまで坂本と言い合ってた女の子。闘志を滾たぎらせた目で佐藤さんに並び立つ。

「アタシが出ます。…代表」

「…優子、任せる」

「ありがとう」って軽く会釈する。友達って距離感………かな？
なんか、ね……。

「ちよつと待て！ おまえは！」

坂本、声大きいから。

「二回出ちゃダメだっていうルールは無いわよ？」

うん、そうだよね。あ、やり返せてちよつと嬉しそう。木下さん、完璧だと思ってたけど、仲良くなれそうかも。

「Aクラス、木下優子。」

Aクラス以外をバカにしていたのは、…ごめんなさい。謝るわ。だから、今からは油断なんてしてやらない」

望むところだから！

なんか、楽しくなってきた。理科の時みたく期待していいのね？

「真由美、行こう」

「もっちろん。律子こそ先走らないでよお？」

「選択権は残りはFクラスになります。科目は、どうしますか？」
得意な科目でいく。Bクラスは、文系の人間が多い。古典、現国、
現社に歴史……今回は、全般でいくか。
「社会で」

うん。と、相方の目を見て頷き合う。

「承認します！」

得意科目ならばAクラスにも負けないっ！

「よろしく」

「お手柔らかに」

「構えなさい。完璧である為にも、完全に完膚無きまでに叩きのめ
して完封し、心服させてあげるっ」

それはまだ見下してるって解ってないんだろーね。周りが気づか
せてくれない。うん。そういう人がいないのかも。なら、
「気づかせてあげる！」

「……試^{サモン}獣召喚！」「……」

『Aクラス 佐藤美穂
Aクラス 木下優子

社会 413点
社会 453点

VS

社会 446点
社会 480点

F (B) クラス 岩下律子
F (B) クラス 菊入真由美 』

っ、はっ ヤバい、なんか超イイ。全くもってスゴイイ。みんなの惚けた間抜けな顔。

真由美は、社会系がずば抜けてる。んで、私は人体構造に関することと国語系が強い。自分で言うのもナンだけど、どちらかと言えば指揮官適正が高く、真由美が策略を巡らせる軍師よりってとこか。なんか体育もお互い得意だけどね。

さあて……、

「おっ始めますか」

「そうだね。友達として、期待には答えたいしい」

言って同時に駆け出す。なんか合図無くとも、追隨してくれる真由美は頼もしい限りだわ。

まずは、戦闘経験の少ない佐藤美穂から！

ていうか、

「温和しそうに見えて、物騒な武器よね」

「『鉄球とか』」

「優子さんまで何で?!」

存外ノリがいい。そういうとこ、

「好きよ? 木下さん」

あ、間違えた。なんか変なとこだけ伝えちゃった。

二人の召喚獣が前のめりになった。やった、チャンス!

剣の腹で叩いて木下さんの向きを変えて、佐藤さんへ向かう。

「いただきっ!」

すり抜けざまに佐藤さんの脇腹を裂き、反転しながら回し蹴りで

押し出す。真由美の突きを避けられる体勢じゃない。さらに、背中に向けての袈裟斬りで挟み撃ち。

先に私の剣先が佐藤さんの体に入ったところで、

「『守護』」

佐藤さんの一言で透き通るような淡いグリーンの光が幕を広げ、

佐藤さんを守って、私も真由美の攻撃も弾かれた。

って！

「何それ！ズルいつ」

叫んでいる間に真由美が飛ばされた。

「きやあつ!？」

「私を忘れてもらっちゃあ困るわね」

なんか、誤算だった。佐藤さんの腕輪の能力が防御に適していたなんて欠片も考えてなかったから。

「始めつから、全力全快の全撃全壊でいくから」

「おー、怖つ。真由美、早く立ちなつて」

「解つてえるよあ。つと」

「姫路さんの熱閃には及ばないけど、さ。『焰』」

木下さんが振るつたランスが炎に包まれた。……………マジ？

なんか、炎にいいイメージないわ。理科に負けた時思い出すし。

「常時展開型の腕輪能力。攻撃力も上がる優れもの」

「わたくしの守りは、味方にも施せる鉄壁」

「「げっ!」」

なんか思いつきり変な声出しちゃった。真由美と一緒にして。

「アタシと美穂の攻撃陣は、強力激烈で凶悪よ?」

おっしやる通りだと思いません。

チラッと相手と目を合わせて、真由美と共に笑みを深める。

だからと言って

「 「 諦める道理は無い! ! 「 「

第二六問 『HOLY』所属？（前書き）

新年あけましておめでとつございます。

今回のタイトルは、

『スクライド』

タイトルだけで解った人はスゴい。

タイトルの理由は、基本中身に影響されます。ってことは……

第二六問 『HOLY』所属？

西洋槍を風車の如く回転させて、私の攻撃を弾く。しかも、爆ぜ散る火の粉が僅かではあるけど、なんかダメージを受ける。ホンツト、厄介。

佐藤さんを見てみると、真由美の攻撃を防いで崩れた体勢の真由美に鉄球を投げつけている。こっちはこっちで面倒。さらに驚異なのが、

「はっ！ やっ、このっ！ キイン、キインキインッ！！」

佐藤さんの能力が木下さんにも同時にかける上に、なんか張り続けることが可能なようなんだよ、ねっ。…っど。

今の攻撃も避けられることなく、幕に邪魔された。

なんかどうするっていうか、どうやって佐藤さんを倒して盾を潰すか………だよねえ。

「随分と余裕、じゃない！」

木下さんの放つランスが穿とうと私に迫る。

「そう、でも無いんだけどね！」

なんとか捌き、距離を保つ………余裕すら無かった。

「考える暇すら与えないわ！」

「ならば作るまでっ！」

搦ち合ったまま、腕輪の能力を解放して木下さんを大きく吹き飛ばした。一瞬だから気づいてないみたいね。

「キャアッ！」

木下さんがぶつかって悲鳴を上げる佐藤さん。ん？………。

「ごめん、美穂」

今、………そういうことかあ。なあるほど。今スゴく悪い顔している自信がある。ま、とにかく、

「真由美っ！ クロスシフト！」

私の呼びかけに対して「待ってました！」とばかりに気持ちのよい返事がきた。

「オツケエー」

うん、なんかアレだけど。

とか言いつつ、召喚獣の立ち位置を入れ替えながら素早く進み、みんなの視線がそれた時に私達自身もこっさり立ち位置を入れ替えた。そして、私の前に真由美の召喚獣が、真由美の前には私の召喚獣が立ち動く。

正直、時間稼ぎかなんかすれば何れは勝てるんだけど、それまでに点数がゼロになる可能性が高い。でもそれは、相手にとってプレッシャーになる。真由美の予想外だろう点数の高さと、木下さんと変わらない私の点数。だと言うのに、大したダメージは与えられず自分達はじわじわと削れていく。

ああ。余裕だつてのは、強ち間違いじゃなかったつてわけだ。余裕に見えたつていうのは、知らないウチに、プレッシャーを感じてたつてことかなんかだと思う。つ・ま・り……、

「エンディングが、見えた！」

「……理科は、黙つてて……」

「酷いわ。ホントなのに」

「相変わらずだわ全く」

「理科らしいけどねっ」

でも今は勘弁して、ね？

だけど私達も、ねえ？ 真由美。

「……………こくり」

軽く頷くだけで答えがくる。

今度は連撃途中に真由美と武器を入れ替えてリーチを変化させる。且つ、斧槍による斬り払いが優位に立たせてくれた。

真由美の方は、幾らか鎖を巻き取って輪っかの部分、繋ぎ目？

を剣先で地面に縫い付け攻撃を制限。
返した。

し終えた瞬間、斧槍を

当たり前前に受け取った真由美に私自身の向かい側にいる佐藤さんも私の召喚獣の向かいにいる木下さんも息を呑んでいた。その透きが佐藤さん達に小さな傷を生む。

一瞬の間をおいて、木下さんが素手になった私を仕留めようと躍起になる。ははっ。ダメだよ、そんなに突っ込んで来ちゃあ。しかも、対向斜線にいる私自身と私の召喚獣を見やり……忙しく視線が動き回る。何処を見ていいか解らなくなって対応しきれていない。ランスを躲して躲して、後ろにいた佐藤さんを飛び超えた。

「あっ!?!」

佐藤さんも木下さんも気づかず、私の避けたランスが佐藤さんのお腹に呑まれた。直撃の時、木下さんが腕を思いつきり引いて貫通せずにとどまった。

決め手に欠ける、か……。ならば!

手を天に掲げたところに炎波状剣フランベルジェが収まり集目される。そして、言わなくともやりたい事を理解していた真由美に胸が熱くなった。

カオティックワールド
「『混乱世界』。アリスの世界を楽しんで?」

真由美の腕輪が輝き佐藤さんの防護幕が揺らぎ、木下さんの焰が大きく燃え上がった。途端、どちらも消滅して木下さん達が声を上げる。

「え? どういうこと?!」

「わたくしも能力が勝手に!?!」

木下さんの首を狙って斬りつける。それに対して木下さんは、
“足下に”ランスをやって……

「っ!?!」

不味いと思っただのだろう、上手く動かせないはずなんだけど我武がむ

者羅に武器を振り回して私の剣と触れ合う木下さん。そして私は、触れ合っただけの刃でその体を吹き飛ばしてみせた。私の腕輪は、ダメージが多少上がりはするけど、ただ吹き飛ばすだけ。ん、でもね、他の効果が高い腕輪と遜色無いのは、消費点数の少なさとほぼ回避不能の一撃。搦ち合った状態からのFクラス土屋の『加速』だったとしても、同時に発動した時点で、とりあえず土屋は吹き飛ばすで、唯一苦手なのが、遠距離からの攻撃。中距離なら即座に詰められるしね。

それをカバーする方法があるっちゃああるんだけど、かなり豪快……かな。真由美も呆れてたもんね。

背後に向き直り、討つ体勢に入る。

佐藤さんが喚きながら鎖を“握って”突っ込んで来た。

「何でなんですか！？ 下がって！ 防御してっ！ 違っ、放つてください！！」

「ムリだよねえ、無意識下のとっさの行動は変えられない。ね？
律子」

そう。私達みたく練習してない人が食らえば

「あべこべになる」

「あべこべになる」

真由美の腕輪能力『混乱世界』は、あらゆる操作、思考が逆さまになる。木下さんが私の攻撃に対してランスを下げたのもそう。佐藤さんが突っ込んで来たのや向き合っていた相手もそうだし、鉄球を投げないで鎖を握ったのもそう。武器を離さなかっただけマシンかな。さらに言うなら、能力が消えたのもそう。“使おうとした”から消えた。ってことになる。ま、攻撃一つにしても防御や回避どころか逃げだしたりもする。やろうと思っていた行動のほぼ正反対の動作に移るわけなんだよ。“ほぼ”っていうのは、ランダム性もあるんじゃないかと思ってる。思ってるって曖昧なんだけど、学園長

も解らないみたい。……………オイ。

そして……………真由美と二人、交差する。

「んじゃ、一人目っ！」

私が横にいちもんじ一文字、

「打倒しいて、…からの」

真由美が縦にいちもんじ一文字を刻む。

「能力解除。で、律子。そろそろ」

そうね。真由美のタイミングに任せて腕輪を使ってもらおっかな。木下さんの攻撃に合わせてやるのがベストだったのは……………うん。解ってるみたい。

「凄いわね、アナタ達」

素直に称賛を送ってくれる木下さん。照れるけれど、嬉しいね。

「でも、なんか苦手なヤツもあるからBクラスなんでしようよ」

「Aクラスは全体的によくできてるけどねえ、Eクラスみたく取り組むものが他に無いからって気がしもなくも無いかな。って」

確かに言ってるかもしれない。

「そうですね……………、わたくし自身もまだ迷っているのでしょうか。けれど、それを」

「認める強さが無い？」

佐藤さんの言葉尻を私が紡ぐ。真っ直ぐに佐藤さんを見つめる。

「……………ですね」

少しの沈黙の後で、佐藤さんから肯定の意を得た。やっぱりかー、って思った。でも、

「なんかさー、甘々だよね」

悪いとは思うけど、そうも感じた。佐藤さん、だけとは言わないけど。

「うん。律子も私も他のみんなだって迷うしい」

当然。だつてのに、なんか……………

「それを理由に見下してる人がいて、容認する教師もおとないるって」「ふう……………さあて、と。」

「これ以上時間かけてもアレだから、ラストスパートに入りますか！」

いち早く木下さんが動いた。

「『焰』アツ！ この一撃に全てをかける！」

くうっ、左腕一本持つてかれた。しかも、炎が私に纏わり付いてくる。

けれど、

「それは冥土の土産に取っておいてよ」

木下さんの姿が破れ被れに見えてしまった私は、逆に冷静になった。

遅れて真由美が反応して『混乱世界』を展開。焰が霧散した。

「ここからはあ、私達のターン」

ナイスよ！ 真由美。つとぉ！

「ついでに教えてあげる。あなた達に足りない物、それは！」

斧槍をバツターボックスに立った選手みたく構えた真由美に向けて木下さんを飛ばす。

「情熱っ！」

木下さんが私の元に打ち返ってきて、それを交互にふっ飛ばす飛ばす飛ばす飛ばす！ そしてその度に言葉を重ねる私達。

「思想！」「理念！」「友愛！」「気品！」

真由美も木下さんを追って走り寄って来る。

「心の広さっ！」

木下さんが返ってきた瞬間、地面に向かって吹き飛ばす。真由美は追い付き、穂先に足をかけて待機。

「優しさああ！」

返す刃で、バウンドした木下さんを上空に斬り上げる。私の腕輪の力で真由美も空高く舞う。

私も跳び上がりながら地面を強く叩いて、自身も木下さんに追いつく。

追い……抜いたっ！

空中を踏み締めるように両足を広げ、正中線を大地と平行に隻腕を大上段に設置した。腕輪の煌めきが今まで以上に強くなっていく。上半身を弓のように大きくしならせ、全力で叩きつけた。

「そして何よりもー！」

私の横を矢の如く通り過ぎる刹那で、剣の腹を当てて能力解放。真由美にさらなる加速を促して

「速さが足りない!!!」

刺し穿つ槍。

神話に謳われた影の槍の如く。彼の槍は、元々女性の持ち主だったらしいんだってさ。

□ Aクラス 佐藤美穂

Aクラス 木下優子

社会 0点

社会 0点

V S

社会 25点

社会 166点

F (B) クラス 岩下律子

F (B) クラス 菊入真由美

□

「勝者、Fクラス岩下律子！ 菊入真由美！」
高橋先生の宣言に、私達も召喚獣もハイタッチ
見たかっ！ なんかスゴい満足。

第二七問 三步進んで二歩下がる(前書き)

今回タイトルは、

『丸出だめ夫』の主題歌に関連。

昭和！ って感じのヤツ。

なんでこのタイトルかっていうと、Aクラス戦が進まんから。。。

おふうっ！ ま、まあ気にしないでください。 くださるとい

いな……

第二七問 三步進んで二歩下がる

何で？速さ？なのかしら？ とりあえずは、

「『『イエーイ！』』」

ハイタッチ。律子も真由美も未恐ろしいわね。あの操作力と腕輪能力。……ちーとなんじゃあ…って思ったのは一人二人ではないはず。

ふと、違和感を覚えて前を見てみると、律子と真由美それぞれが左右のほっぺを持っていた。

「にやにしゅんのよー」

「なんか理科のほっぺたやらかそうだったし、実際やらかいし」
ぽにゅぽにゅしながら話さないで。

「至福うって言葉を実感ちゅ〜」

「ねー？」じゃないわよ。自分のでしなさいよ。

チラッ。と律子を見やる。

「〜」

かなりご機嫌ね。

ちらっ。今度は真由美を見た。

「あんっ って、さり気に服の下に手を突っ込まないで」

「胸は柔らかかあいかなって。ついでにおっぱい大きくしてあげよう
と」

「女なんだから柔らかいし、おっぱい大きくしてなんて望んじやいないし。あとね、せめて了承とりなさいよ」

真由美を嗜めると、すぐさま尋ねてきた。

「理科あ、おっぱい揉んでいい？」

「いいわよ」

もちろん、快くOKを出したわ。それが友達ってもんよね。

「即答か！ それよりなんか、さっきから何言ってるのよ」
明久じゃなく律子にツッコまれるとは。

で。律子の問に対して真由美と二人して唸った。

ん〜……、何って。

「「おっばい」

「何言ってるの！？ しかも、こんな目立っても手を離さないの？」

そうね。忘れてしまうほどのフィット感。うん、スゴいわね。

「手ブラって」

「手ブラ！？ 下着の下に突っ込んでんの！？」

後ろから抱きしめ、掬い上げるように胸を掴んでいる真由美。耳にかかる息がくすぐつたい。

よく解んないけどたぶん……真由美はテクニシャン。ああ、スゴいわ。かなり、

「クセになりそうっん……」

「なっっちゃダメ！ それに、なんて声出すのよ！」

あ、これ以上なんか言わないでいいからね？」

「「…はい」

何か返す前に畳み掛ける感じで遮られた。

今の律子には死を覚悟させられたわ。真由美と一緒にして素直に返事をするのに何ら異存は無い。

周りを見てみると、血の海だった。あら？

「何かあったの？」

（「「「あんたらのせいだよ！」「」」）

生徒く教師まで心がレゾナンスしてた。 みたい。あとで明久に聞いた話。

そしてその件の明久はというと………翔子くだんによって沈められていた。

「下乳か…、やるわね」

翔子は制服をそこまで捲り上げて同じことをさせようとして、明久の息の根を止めた。

ツツコミが無いワケだわ。

あ、そうそう。

「ねえ、なんで？速さ？だったの？」

ちよつと気になってたのよ。

「ああ、あれね。孔子も言ってたでしょ？」

“少年易老学難成”

（若いうちはまだ先があると思つて勉強に必死になれないが、すぐに年月が過ぎて年をとり、何も学べないで終わってしまう、だから若いうちから勉学に励まなければならぬ）って。

なんか何も考えていないで停滞しているようにしか見えなかったし、光陰矢の如しだから後悔してからじゃ遅いんだよ、速く。ってね」

まさかここで孔子とはね。文系に関しては、律子トップクラスかな。

「律子お、

“朝聞道、夕死可矣。”

（朝に人としてなすべき道を聞くことができれば、その日の夕方に死んでも後悔しない。真理を求める尊さをいう）ってのもあるよ？ やりたいことやれずに死んじゃうってのはヤだもんね」

あ、真由美も。

んー？ 解らせてあげるんでしょう？ 木下姉や佐藤、それに高

橋教諭などの講師陣にも。全く。

「だからこそ必死に生きてるんでしょ。大人はそれを忘れてしまったのかもね。」

「？必死？にではなく、？一生懸命？にとどまる。」

そして、極々一部の握りぐらいが？必死？で居続けられる。だからこそ、誰もが懂れるワケ。

つまりはそれが、プロスポーツ選手であり、大俳優であるって事に暗に木下姉に対して木下弟の事を揶揄して示した。あなたの弟さんは、あなたと違って目指している場所があるってね。

「結果、最後は理科が持つていく、と」
「フォローしとこうかと思って。」

「いつもいつもカツコいいよねー、理科はあ」

真由美に褒められて悪い気がしない。大きくも小さくもない半端な胸を張って返す。

「まあね。やりたいことをやり続けてるからね。もちろん、これからも。」

だから言えるのよ。勉強だけしたって何にもなりやしない。目標や目的があって初めて意味が成す。ただ闇雲に勉学を詰め込んで何になるの？ 学者になりたいってんなら別」

「確かにねー」

みんなが勘違いしないよう補足する。

「あー、だからと言って疎かにしろってことじゃないわよ？ 部活だけやってるEクラスも、せめて勉強する癖ぐらいはつけなさいな。ってこと。」

将来、プロスポーツ選手になっている可能性は、まさしく一握りの逸材。どれだけ辛くても、苦しくても……諦めずに努力をし続けられるって人間は、きつと違うんでしょうけどね。

ま、その努力も、ひとの何倍何十倍つてのをできるかは大切。

努力できるっていうのも、才能の一つなんでしょうね」

キリのいいところで声がかかった。

「そろそろ、最後の一方前に出てください」

おうっ、ナイスですね。己の事第一に動く！そこに痺れる憧れるうーっ！って、忘れてた。とは言えないわね。何より高橋教諭の仕事だし。高橋洋子氏（うじ）は、できる女。

「随分と話込んだみたいね。全く、飽きないわ律子も真由美も」

「「理科アンタが言うな」」

え？ どういうこと？ むう………いつか。

とりあえず、明久ががんばれえ。（生死的な意味合いで）

第二八問 刀語り（前書き）

タイトルは、

『刀語り』

西尾さんのアレです。

舞台本番近いのに、投稿w

稽古は、あと五回。そのうちにセリフ回しと殺陣を完璧に……、
オレ死んだ……か？

第二八問 刀語り

静かだけど凜とした声上がる。

「……はい」

Aクラスから出てきたのは、翔子。

そして、こちらのクラスからは……

「俺の出番だな」

「待つて雄二。ここは、僕が出る」

「は？ 負けられないんだぞ」

「だからこそだよ。どうせ雄二は、復習とかしてないんでしょ？」

「うっ！ だがな！」

「操作技術から言っても、僕の勝率の方が高いつて雄二も理解してるよね？」

明久の言ってることが理解出来ているからこそ、坂本は何も言えずにいる。

「……雄二」

そこへ翔子が言葉を挟む。

「……あなたでは私に勝てない」

「そんなの！」

憤る坂本に翔子は、「……やってみなくとも解る」と、淡々と先読みして答えた。

「……今現時点で、テストの点数だけでの召喚獣勝負しか受けない」

「っ！ 何を勝手な。こっちは選択権がある」

尚も食い下がる坂本に、翔子は透きの無い答えと真っ直ぐな気持ちでもって返した。

「……科目選択であってルール選択権ではない。

それに、私は明久としたいの」

「くっ……、勝手にしろ」

そのセリフが決定打になって、坂本が後ろの方へと下がっていった。

入れ代わりで明久が前に出て、翔子と対峙する。

「高橋先生、Fクラスは吉井明久が出ます」

「解りました。教科はどうしますか？」

「どうしよつか、翔子ちゃん」

「……日本史。と言いたいところだけど、それじゃ私は勝てない」

「「「はあ？」」」

恐らくは、高橋先生を除く全員が声を上げた。

あら？ 律子と真由美は動じないのね。

「律子も真由美も驚いたりしないの？」

「なんか、可能性として考えてたしね」

「うんうん。幼なじみの理科が放置しないだろうしい、霧島さんと仲良さ気だからあ、霧島さんなら教えてそうだなあって」

うん。古典に関しては学年一位になり得る二人だけあるわ。

「じゃあ、総合科目でいこう。それなら、いい勝負ができるしね」

「吉井君、本当によろしいですか？ 日本史ならば、あなたの勝率はかなり高いんですよ？」

「それだけの点差があるってことですな。」

それでも、です」

「解りました。これ以上は言いません」

みんなが明久のセリフに「何言ってるんだ？」と訝し気な視線を浴びせていることに気がついた高橋先生は、

「因みに、吉井君と霧島さんの点差は226点です」

さらつと補足した。

それを聞き流せなかったのか、坂本が大仰に驚く。

「はあ！？ 明久が、か！？」

「はい。吉井君が、です」

淀み無く受け答えしている高橋先生。

眼鏡のズレを直して二人に促す。

「では、そろそろ始めましょう」

「翔子ちゃん、よろしく。」

試験召喚！^{サモン}」

「……此方こそ。試験召喚！^{サモン}」

『Aクラス 霧島翔子

総合 5634点

VS

総合 5519点

『Fクラス 吉井明久』

クラス中が騒めき立つ。

『学年一位の霧島だけじゃねえ！？ 二人共にスゲー！』

『姫路の点数より、千点も高い！』

『どうなってるのよ！？ 《観察処分者》じゃなかったの?!』

はあ……。《観察処分者》だから侮るっていうのは、理解に苦しむわね。

……始まる。

「翔子ちゃん」

明久は元々学ランに木刀だった装備が、この学園の制服に刀と脇

差。

「……解ってる。油断するつもりは毛頭無い。…全力」

翔子は日本の武将達が着けていたような感じの鎧に兜は無い剥き身の頭部と、同じく刀を持っていた。明久と違うのは脇差が無いってことでしょうね。

明久は鞘に収めたまま、翔子は既に抜刀して青眼に構えて切っ先を鵲鳩せきいの尾のように動かし、静かに佇んでいる。

明久が僅か刃を見せる程度抜く。

まずは、

「……………はあっ！」

翔子が先駆け動いた。

それに合わせて明久も抜刀し、腕をだらんと下げた。

翔子はそのまま大上段からの兜割り。明久はその攻撃に対して刀の棟で翔子の刀を跳ね上げ、自らの刀の切っ先を頭上に持っていき、左から右へ車に廻して勢いを付けて袈裟に近い胴斬りを行う。

「…っ！」

端から見ても解るくらいに息を呑む翔子。

間一髪。明久の攻撃を後ろに飛び下がって避け、その反動を利用して明久の頭上に飛び上がり、一気に斬り降ろす。

胴への攻撃を避けられた明久は無理に体勢を整えたりはせず、風呂の勢いを殺さないままに回転。後退しつつやや下がり気味の平青眼（刀を横に寝かせた中段の構え）で、じつと相手の動きを待って一気に攻める為に構えた明久。

「……………甘い、二段構え！」

だが翔子は刀を振り降ろした後、さらに下段から地面すれすれに刀を打ち上げて、相手の小手を浅く斬る。

「くっ…！」

そして、そのまま首を狙いにきた斬撃に対して、明久は急遽中段の位置から刀を押し出す形で袈裟を放つ。

カキイイーン！！！！……………。

明久と翔子が鏝競り合う。

「……ふっ……………」

明久と翔子につられるかのようなタイミングで揃って笑みを零した。

静まった教室に響く二人の声。

「さすがにヤルね、翔子ちゃん」

「…明久こそ」

瞬間、

『『『うおおおっ！！！！』』』

音が爆発した。

誰も彼もが興奮を隠せないでいる。まるでお祭りね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5786r/>

元バカと黒髪美少女と薬師

2012年1月15日03時10分発行